Osaka University Knowledge Archive

Title	海野一隆先生の研究業績とその地図学史的意義
Author(s)	久武, 哲也; 鳴海, 邦匡; 堤, 研二 他
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2007, 47, p. 185-234
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12563
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

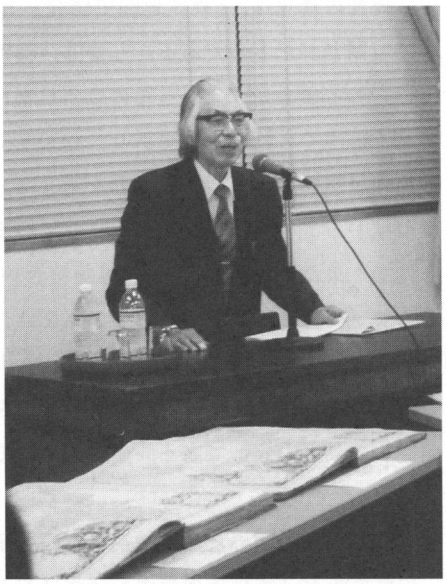
Osaka University

海野一隆先生の研究業績とその地図学史的意義

久武哲也
鳴海邦匡
堤研二
小林茂

I　はじめに

海野一隆先生（1921－2006）は，平成18年5月4日，84歳でご逝去になった。その生涯にわたる研究業績は，共著や共同編集になる著書も含めて，16冊の著書と300編以上の論文にも及ぶものであり，こうした厖大な研究業績をその研究方法も含めて簡潔に，しかも過不足なく紹介することは，ある意味で，大きな困難を伴うものである。ここでは，海野先生の長年にわたる研究の中でも，最も中心的な課題であった地図史，とくに日本も含めて，中国・朝鮮半島・東南アジア・インド・西南アジアにまで及ぶ「東洋地図学史」研究の持つ意義を，日本における地図学史的研究あるいは地理学史的研究の流れに沿って紹介することでその解題に代えたいと思う。



ダンヴィルの地図帳を前に講演される海野一隆先生
（東洋文庫の東洋学講座，2004年10月26日）

海野先生の厖大な研究は，最終的に，晩年になって集大成された『東西地図文化交渉史研究』（清文堂，2003，718頁），『東洋地理学史研究・大陸篇』（清文堂，2004，352頁），『東洋地理学史研究・日本篇』（清文堂，2005，625頁）の中に，その主要な論文は収録されているが，すべてを網羅したものではないし，また，この3部作ともいうべき著作の中に収録された論考は，初出の論文に大きな修正が加えられており，また，詳細な注の補足や多くの「補論」，「余論」などの追加が見られ，必ずしも原著論文のままではない。それは，先生の「地図史小品」とも言うべきエッセイや事典項目，さらに各方面の雑誌や同窓会誌などに執筆された論考を集成した『ちずのしわ』（雄松堂出版，1985，338頁）あるいは『ちずのこしかた』（小学館ス

クウェア，2001，287頁）とは内容的にも大きく異なっている。この晩年の3部作ともいうべき著書に込められた先生の熱意は，それを読むものにひしひしと伝わってくる。そして，こうした既往の論文を，新しい研究の成果を取り入れながら集成しようとされた先生のご意志は，逝去時に残された遺稿である『日本人の大地像』（大修館，2006年12月刊行 266頁）および『地図文化史上の広輿図』（原稿用紙470枚）などを拝見しただけでも深く感じ取ることが出来る。古くから抱いてこられたいくつかの研究のテーマやその課題を，絶えず心の中に留めながら，長年にわたって日本あるいは海外の研究機関やコレクションでの史料収集あるいは現地調査を通して深化されてこられた過程が，こうした遺稿のなかにも読み取ることが出来る。

海野先生の研究を最も大きく特徴づける枠組みは，「東洋地理思想史」とも言うべき分野であり，そのなかで，アジアのそれぞれの地域において蓄積されてきた地理的知識や世界観を地図というメデイアを通してどのように表現してきたか，という点に集約されると思われるが，その視野の中で展開される分析の内容は，地図の中にみる宗教的観念や世界像，土着的宇宙観と国土認識，地図の中に込められた地理的知識とその伝承の系譜，地図の交流と地理学的知識の世界的伝播，測量術と地籍の把握など，さまざまな分野にわたると同時に，その研究の対象とする範囲も，日本，中国，朝鮮半島，東南アジア・インド，内陸アジアから西南アジア，さらにヨーロッパにまで及ぶものである。こうした海野先生の「東洋地理思想史」研究の構想は，「東洋地図史研究」と「東洋地理学史研究」とをその主要な構成部分として展開されたものである。しかし，海野先生が「地理思想史」という用語を論文の題目に掲げられる機会が少なかったのは，日本における「地理思想史」という研究分野が，比較的新しく形づくられたものであり，1980年に日本において開催された国際地理学会（IGU）の「地理思想史」委員会での活動を通じて，1980年代の後半ごろから日本の研究者の間に少しずつ拡がっていったこととも関係している。海野先生は，1980年の国際会議においても大きな役割を果たされたが，「地理思想史というのは，まだ私の中で成熟したものとして，確固たる枠組みを持っているものではない」と発言しておられた。先生の晩年の3部作のうち，2冊が「東洋地理学史研究」という表題をもつのは，そうした先生のお考えによるものであろう。しかし，国際的にみて，海野先生の業績は，「地理思想史研究」と「東洋地図史研究」の双方の分野で高く評価されているのである。

Ⅱ　アジアへの関心と「仏教系世界図」研究

海野先生が「東洋地理学史」研究に惹かれる契機となったのは，京都大学の学生時代に受講された主任教授の小牧実繁（1898－1990）による「地理学史」の講義であったようである。

「小牧先生が私どもに講じられた「普通講義」は地理学史であった。それは西洋を主とす

るものであったが，初めの２－３回をシナのそれに当てられ，それが今こそ顧みられるべきことを強調された。それまで地理学は西洋にしかなかったものと思い込んでいた私には，一つの驚きでさえあった。やがて私がシナの地理学に関心を抱くようになったのは，アジアへの回帰が叫ばれていた当時の時代的風潮になじんだせいもあろうが，また一つには先生の講義が機縁となっているように思われる。」（『東西地図文化交渉史研究』，2003，101頁）

当時の京都帝国大学の地理学教室は，戦時下体制の中で，「東洋的価値」を基盤にした地政学の牙城でもあった。西洋地理学の批判あるいは西欧の侵略的探検史批判などが「日本地政学」という名のもとで活発に展開され，「アジアへの回帰」が声高に叫ばれていた。そうした雰囲気の中で，海野先生に中国研究，とくに中国の「方志」研究を積極的に薦めたのが，当時の地理学教室の助教授室賀信夫（1907－1982）であった。それは，戦後まもなく刊行された先生の「中国地理学史における読史方輿紀要の位置」（『地理学報』１号，1950）や「読史方輿紀要とその地域論」（『史林』36－３，1953）などに結実する。戦後の社会的混乱の中で，一時中国研究を諦めかけていた先生に，中国研究の続行を再度積極的に薦めたのは，生涯にわたる師でもあった室賀信夫である。

「昭和23年に大阪に移り住んでからは，しばしば（室賀先生の）お宅へ伺い，先生を難問攻めにしたが，その都度聞かせて頂く明快な意見は，どれほど私の思想形成に役立ったか計り知れない。私にとって室賀先生はまさしく人生哲学の師であった」（「室賀先生の手紙」，『室賀信夫先生追悼文集』，1988）。

こうした人生哲学の師，室賀信夫に対する思いは，「デストムブ氏紹介のパリ国立図書館所蔵シナ図について」（1977）の論文が，室賀の古稀記念に際して献呈されているだけでなく，室賀の没後25年も経た2006年，海野先生のご逝去の２ヶ月前に公表された「補・室賀信夫遺稿『伊能忠敬研究の回顧と省察』」（『洋学』13，2006）の中に見るに先生の解説の文章にも端的に表現されている。この師である室賀信夫から「仏教系世界図」に関する共同研究に誘われたのは，昭和29（1954）年のことである（「室賀信夫先生の訃」歴史地理学117号，1982）。それは，室賀を中心にして同人雑誌『地理学史研究』の発刊が企図され，それに発表する研究として仏教系世界図を取り上げることが決められ，海野先生に共同研究の依頼が来たのである。その共同研究は，「わが国における仏教系世界図の諸本」（『仏教史学』４－３・４，1955）から「日本に行われた仏教系世界図について」（『地理学史研究』１集，1957），さらに「江戸時代後期における仏教系世界図」（『地理学史研究』２集，1962）として纏められたし，また個別に，海野先生は「中国仏教における世界区分説 ― 四主説の地理的展開 ―」（『田中秀作教授古稀記念論文集』，1956），「南瞻部洲萬国掌菓之図の反響」（『地理学報』７巻，1957），「崑崙四水説の地理思想史的考察 ― 仏典および旧約聖書の四河説との関連において ―」（『史林』41－５，1958）などを発表され，仏教と地図，宗教的

地域区分とその伝播関係，あるいは西洋の地理学的知識の導入と仏教的世界観の変容などの「仏教系世界図」と関係する問題を詳細に検討された。

この共同研究が，国際的に評価される契機となったのが，昭和32（1957）年に日本において開催された国際地理学連合（IGU）の地域会議であった。この会議は，東京と奈良で開催されたが，奈良の会議は，天理大学を会場に日本の古地図の展示を中心としたもので，多くの海外からの研究者の注目を惹いたのである。この時，室賀信夫は同人（織田武雄，鮎沢信太郎，野間三郎）と共に編集し，出来上がったばかりの『地理学史研究』の第1集（「古地図特集」，1957）をこの会議に参加した外国人学者や海外の地図学史研究者に配布したのである。その結果，国際地図学史会議の機関紙である『イマゴ・ムンデイ』誌の編集委員会から室賀信夫に対して寄稿の依頼があり，これまでの「仏教系世界図」に関する共同研究の成果を室賀と海野先生の共著で「日本における仏教系世界図とその西洋製地図との接触」（The Buddhist world map in Japan and its contact with European maps）と題して『イマゴ・ムンデイ』誌の第16巻（1962）に発表することになったのである（『東洋地理学史研究 日本篇』，612頁）。この論文に対して，海野先生は共著者の一人として，最も優れた地図学史研究に与えられる「イマゴ・ムンデイ」賞（1963年度）を受賞されたし，さらにこの共著論文は，1965年にスペインの代表的地図学史研究者であるカルロス・サンスによってスペイン語にも翻訳され，海野先生の令名は，英語圏だけでなくスペイン語圏でも知られることになった。

海野先生の「仏教系世界図」研究のモチーフは，アジアにおける宗教とヨーロッパの地理的知識の伝来に伴って発生する日本における宗教教義との新たな矛盾や葛藤，そして教派内部の教義論争，さらに宗教各派相互間における対立と論争の発生，その結果としての地理的知識あるいは地球観や世界像の変容といった宗教と世界観・地球観の問題にまで深められながら，その後も長年にわたって維持され，多方面に広がりをみせたのである。それは，仏教だけに留まらず，儒教や道教，さらに神道や民間の宗教儀礼と地図的表現との関係にまで広がっていったのである。「仏教系世界図」研究に関するその後の新たな進展は，「両部神道家源慶安の地球説支持と仏教界の反応」（『科学史研究』112号，1974）あるいは「宗覚の地球儀とその世界像」（『科学史研究』117号，1976）などの論考において特徴的に示されている。それは，神道家が仏教や儒教との思想的対抗手段として，西洋からの地球球体説を積極的に支持していく過程や仏教の中でも，旧来の「仏教系世界図」の内容を西洋の地理的知識によりながら部分的に修正したり，あるいは，ヨーロッパ伝来の新しい世界像を仏教の教説に沿うかたちで組み替えながら，しかも地理的情報を適宜取捨選択していく過程が詳細に検討されている。

また，日本の伝統的国土図ともいえる「行基図」に関しても，宗教と地図という側面から，

新しい見解を示された。「行基図」(1984年,『ちずのしわ』1985に収録)や『イマゴ・ムンデイ』誌46巻(1994)に掲載された「祈願・まじないに使われた日本図」(Maps of Japan used in prayer rites or as charms)あるいは「『拾芥抄』古写本における地図 — 天文17年本を中心として —」(『ビブリア』101・102号, 1994)などの論考で示された見解である。「行基図」型日本図に見られるような日本の国土の形象が,両端の尖った金剛杵である「独鈷杵」や「如意宝珠」に似ているという「国土独鈷説」が14世紀前半に成立していたこと,それが唯一神道につながる人々によって支持されていたことなどを明らかにされただけでなく,「行基図」そのものが,行基によって始められた「追儺の儀式」において,死者や悪霊が帰還できない国土の四至を定め,国土の安寧を祈願する儀礼として用いられたものであり,それは神道や陰陽道と結びつきながら,長く存続してきたことを,仁和寺所蔵の日本図に依りながら説得力ある議論を展開された。そして,近世の「行基図」型日本図の刊行とその民間への普及が伊勢暦や地震の占いなどと深く結びつきながら拡がっていったことを,多くの残存する日本図を比較検討する中から論じられた。こうした海野先生の「行基図」に対する新しい見解と解釈は,その後の日本の地図史研究者に大きな刺激を与えたのである。

Ⅲ 中国および朝鮮半島の地図史研究

海野先生が,中国の地図に関心を持たれるようになったのは,直接的には,戦後まもなく発表された「読史方輿紀要」をめぐる論文(1950, 1953)と結びつくものであったが,とくに昭和32(1957)年に開催された国際地理学連合(IGU)の地域会議での古地図の展示に伴う資料の収集の過程において天理図書館で発見された「大明国図」との出会いからであろうと推測される。この「大明国図」に関する論考,「天理図書館所蔵大明国図について」(『大阪学芸大学紀要』6号, 1958)では,それまで知られていた「混一疆理歴代国都之図」(1402,龍谷大学所蔵)や熊本の本妙寺図と比較しながら,次のような結論を導かれたのである。

「この図の特色はほかならぬ神仙説を背景として『混一疆理歴代国都之図』を改訂した点であろう。亜欧にまたがる広い地域を詳細に表現した図として,同系統の図と共に東洋における世界地図史を飾るに足るものといえる。それは朝鮮地理学史の研究に新たな光明を投げかけるだけでなく,龍谷大学図や本妙寺図と並んで,元代のシナに伝来したイスラム地図の内容を明らかにするものである」(『東洋地理学史研究・大陸篇』, 2004, 219頁)。

この「大明国図」の分析の対象は,「シナ」,「塞外」,「中央アジア」,「西アジア以西」,「海島」,「朝鮮」,「日本・琉球」にまで及ぶ。いわば,イスラム系地図を含めた「東洋における世界地図史」研究の枠組みを,この時点で明確に意識されたということである。そして,この「大明国図」のみならず,「混一疆理歴代国都之図」が,日本で作成されたものではなく,朝鮮半島から将来されたものであるということは,日本の地図史研究にとっても,

朝鮮地理学史あるいは朝鮮地図学史の研究を必要とするということであった。海野先生の朝鮮地図学史に関する論考としては，「朝鮮李朝時代に流行した地図帳 — 天理図書館所蔵本を中心として —」(『ビブリア』70号，1978)，「李朝朝鮮における地図と道教」(『東方宗教』，57号，1981)，「朝鮮地図学の特色」(『韓国科学史学会誌』5－1，1983)，「16・17世紀における西洋製地図上の朝鮮」(European cartography of Korea in the sixteenth and seventeenth centuries. *Journal of the Korean History of Science Society,* 9-1, 1987) などがあるが，とくに注目されるのは，「初期天下図」をめぐる「李朝朝鮮における地図と道教」の論考である。この「天下図」は，12世紀中ごろから朝鮮で作成された「仏教系世界図」に対する，儒教的立場，あるいは道教的立場の人々の不満，さらにまたマテオ・リッチ系の西洋世界図に対する批判の妥協的産物として発生したものであることを指摘された。

「こうした排外思想の台頭がいつ頃であったのかは，明確に知り得ないが，保守的な人々にとっては，伝来の当初から大地球体説やそれと表裏一体をなす西洋の世界地図は，歓迎すべきものではなかったであろう。しかし，彼らにはそれに対抗させ得る世界図の持合わせがなかった。わずかに仏教系世界図が伝存してはいたが，それは余りにもインド偏重であり，儒教にとっては好ましいものではなかった。こうした状況のもとで試みられたのが，道教的ないしは神仙的な世界像の図形化ではなかったろうか。もしそうだとすれば，俄か作りという印象を与えないためにも，地名を過去のものに限定し，古来の作品であるかのように見せかける必要があったのであろう。...いずれにせよ，天下図発生の直接の引き金となったものは，西洋系世界図への対抗意識であったと言ってよいであろう。発生の年代は，各種の参照資料から見て，17世紀後半ではなかったかと思われる。そして作者は天下図にシナ・日本・琉球・八道の諸図を伴わせることによって，その空想性の希薄化，換言すれば現実性の付加を狙ったのではないだろうか」(『東洋地理学史研究・大陸篇』，2004，283－284頁)

伝統的に朝鮮地図学を支えてきたと思われる「天下図」が，比較的新しい時代の，西洋との接触以降の対抗意識の形成の中で作成され，そして民間に普及していったものであることを明示されたのである。それは，地図学における「伝統の発明」過程を明らかにされただけでなく，その思考方法あるいは史料解釈の方法は，西洋の地図や地理的知識，さらに地球球体説に遭遇した日本における「仏教系世界図」の変容過程の分析と共通する基盤を持っていたともいえよう。

海野先生の体系的な中国地図の分類や系統に対する関心は，「江戸時代刊行のシナ地図」(『大阪学芸大学紀要』第9号，1961) の論文で示されたものが最初であろうし，それは，最終的に，「江戸時代刊行のアジア諸地域地図」(『東洋地理学史研究・日本篇』，2005，335－424頁［新稿］) として拡大されたもので，晩年まで，こうした江戸時代に刊行されたアジア全図，東アジア図，中国図あるいは朝鮮図，東北アジア図，東南アジア図，南アジア図，

内陸アジア図などの体系的収集が継続的に行われていたことを知ることができる。「江戸時代刊行のシナ図」の論考では，宋代の地図の系統（1，歴代地理指掌図系，2，事林広記系），明代の地図系統（1，広輿図以外の系統，2，広輿図系，），清代の地図の系統（1，康熙実測図系，2，大清一統天下全図系）という分類と系統が示されているが，後者の論考（2005）では，「シナ図」の中を，1，「歴代地理指掌図」系，2，「六経図」系，3，「一七史詳節」系，4，「大明一統志」系，5，「広輿図」系，6，「志略」系，7，「三大幹龍図」系，8，「一面図の和刻」，9，「康熙図」系，10，「黄千人図」系，11，「西洋系」，と11の系統に分類されている。これは，おそらく「漢民族社会における歴史地図の変遷」（『唐宋時代の行政経済地図の作成』，1981）の論文の中において分類されていた「主要系統歴史地図」（1，「歴代地理指掌図」系，2，「六経図」系，3，「十七史詳節」系）を含めて，全体の系統分けがなされたのであろう。しかし，中国においてもまた日本の近世においても，その影響力が大きかったのが，「広輿図」系と「康熙図」系の地図であった。海野先生は，こうした近世日本にあって刊行された「シナ図」の系統分類からとくに，明代の「広輿図」のもつ大きな意義を認識されていったのではないかと思う。

Ⅳ 「広輿図」研究とその地図学史的意義について

海野先生の本格的な「広輿図」研究は，「朱思本の輿地図について」（『史林』47－3，1964）に始まり，「広輿図の資料となった地図類」（『大阪大学教養部研究集録』第15輯，1967），「広輿図を模した地図帖 ― 広輿考・皇明職方地図・輿図要覧について ―」（同前，第20輯，1972），「広輿図の反響 ― 明・清の書籍に見られる広輿図系の諸図 ―」（同前，第23輯，1975），「ヨーロッパにおける広輿図 ― シナ地図学西漸の初期状況 ―」（同前，第26輯，1978），「ヨーロッパにおける広輿図 ― シナ地図学西漸の初期状況 ―（承前）」（同前，第27輯，1979）と，1960年代半ばから1970年代末まで継続されている。しかし，「広輿図」をめぐるこうした論考はすべて，晩年に刊行された『東洋地理学史研究・大陸篇』（2004）の中には未収録になっている。それは，遺稿となった『地図文化史上の広輿図』（400字詰原稿用紙470枚）として，単独に出版されるご意志を持たれていたからであろうし，また晩年に至るまで，新たな史料の収集を継続しながら「広輿図」研究を深化させてこられた証左でもあろう。

「広輿図」は，周知のように，明代の羅洪先によって16世紀の中葉に編集された中国における最初の総合的地図帖である。そしてまた，それは中国の唐・宋ひいては元の時代における伝統的な地理的情報や地図作成方法をも受け継ぐとともに，イスラム系の世界地図や東南アジアの先住民の地図，さらに日本の行基図などの現地の地図情報を基礎に，ヨーロッパやアフリカ，あるいは中国の近隣のアジア諸国の地理的情報も取り入れながら作成された，中

国における最初の「世界地図帖」ともいえる性格を持っている。

海野先生の「広輿図」研究の大きな意義は，中国地図学史研究の中で，これまで見過ごされてきたとも言える「広輿図」の諸版本を世界の数多くの研究機関や博物館，個人のコレクションや蔵書にあたりながら収集し，中国だけでなく，世界的にもその影響力のもった大きさを明示されたという点にあろう。こうした世界各地に散在する諸版本を調査・比較しながら，その初版の刊行年代やその地図の内容を確定される（Concerning a MS map of China in the Bibliothèque Nationale, Paris, introduced to the world by Monsieur M. Destombes. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, No.35, 1977）と同時に，この「広輿図」が16世紀中葉の刊行から清代の中期に至るまで７回の改訂と覆刻を経て，19世紀の末期まで350年以上にわたり中国においてその影響力を保っていた点を明らかにされただけでなく，この「広輿図」の持っていた意義をさまざまな側面から指摘された。海野先生の「広輿図」研究は，その史料批判という側面だけでなく，取り上げるテーマや史料的価値に関する意義付けという点に関して，大きく次の４つの点に集約されるかと思われる。

1．中国の地図史研究の上で，「広輿図」は元の時代に朱思本が作成（1320年頃）した方格図法による一枚の「輿地図」を基本的資料としながら，それを省別に分割した上で，さらに近隣の地域に関する地理的情報を「特殊図」として加えて，1550年代に刊行された世界地図帖であるといわれてきた。また，従来，この元代の朱思本の「輿地図」はイスラム地図学の影響を受けたものであるという考え方が一般的であった（小川琢治『支那歴史地理研究』，1928 所収，「支那地図学の発達」）が，しかし，海野先生は，「広輿図」の初版本の検討を通じて，すでに失われた「輿地図」の原型を復元する作業を行い，この「輿地図」が，基本的に，道士であった朱思本が中国国内の主要な山川・河海の祭祀を目的として作成した純粋に中国国内を描くものであり，また伝統的な地図作成方法を受け継ぐものであって，方格の網目を持つ描法もイスラム地図学の影響というよりも，むしろ唐代から続いて来た中国の伝統的な地図作成の技法であることを明らかにされた。「広輿図」は，そういった意味で，海野先生によって初めて，これまで失なわれてきた中国古代以降の伝統的な地図の内容，およびその作成技法を復元するための重要な地図史料として位置づけられたのである。

2．日本研究あるいは日本地図史研究との関係で「広輿図」を見れば，16世紀以前に既に日本に舶載されていた「混一疆理歴代国都之図」（龍谷大学所蔵，1402年など）と同じく「広輿図」は元代の李沢民の編集になる世界地図（「声教広被図」）などを積極的に利用している点，あるいはこれらの地図情報の中にイスラム地図学からの深い影響が見られる点などについては，従来からも指摘されてきた。しかし，海野先生は，これらの３つの地図を比較しながら，アフリカやヨーロッパなどの地理的情報に関しては，共通

に中世のイスラム世界地図に由来する地理情報に依存しているものの，「広輿図」についてみる限り，東・東南アジアの地図的記載に関しては，日本の行基図を始め，朝鮮半島の伝統的地図や地誌，あるいは南海諸島の先住民によって作成された土着的地図など，現地のより土着的で正確な地理情報を基礎に作成されたものであるという点を初めて指摘されただけでなく，中国が当時にあって，日本の行基図型の日本図や地理的情報をどういう経路で入手し，それを「広輿図」作成過程の中でどのような形で利用したのかという点についても明らかにされた。さらにまた朝鮮半島の記載についても，朝鮮に存在した土着的地図や地理的情報がどのような形で「広輿図」の地図編集の過程で利用されたかという点について，朝鮮側の地図史料と関連付けながら新しい議論を展開された。こうした海野先生の多面的な議論から，中国が東・東南アジアの各地の土着的地図や地理的情報の収集を通じて，当時の辺境（海内・海外夷）地域に対してどのような地理的イメージを抱いていたのか，という大きな研究の課題が初めて浮かび上がってきたし，また日本に関しても，「広輿図」が，「混一疆理歴代国都之図」などの地図史料とともに，その東アジアの地図的記載様式の検討を通じて，日本の古代・中世における中国との交渉史の中で，「中国における日本像の変遷」という研究課題を，今後，より深く探求していく際の重要な地図史料であることが明らかにされた。

3．また，西欧との地図交渉史という側面から見た場合，この「広輿図」は，刊行後すぐに，ポルトガル，イギリス，イタリア，さらにオランダやベルギーなどの地図作成者あるいは航海者，さらにイエズス会やアウグスチーノ会などの宣教師によってヨーロッパ諸国に舶載され，当時の中国に関する最も信頼の置ける地理的情報源として18世紀の後半期まで利用されながら，ヨーロッパにおける中国の国土認識の形成に最も大きな影響を与えた地図資料であった。海野先生は，16世紀中期から18世紀中ごろ（1735年）のダンヴィルによる「康熙図」（「皇輿全覧図」）の翻訳図の登場までの時期にあって，「広輿図」が，どのような経路でヨーロッパの諸国に舶載され，またポルトガルやイギリス，オランダやフランス，さらにイタリアなどの諸国で「広輿図」を基礎としてどのように中国図が編集されたかを史料的に綿密に辿る一方，それぞれの国にあってこの「広輿図」の描くアジア地域の姿が様々に異なって表現されていることを明らかにされた。「広輿図」が当時のヨーロッパにおける最も信頼にたる中国図として利用されたことを明らかにされたのみならず，そこに描かれている日本の国土像が，日本から舶載された地図や地理的情報を基礎とするだけでなく，「広輿図」などの中国の様々な地図情報から得られた地理的知識を合成しながら形成されたものであることも合わせて明らかにされた。いわば，西欧における日本像の形成に作用した中国地図の役割も同時に指摘されたわけである。その最も重要な位置を占める中国製の地図が「広輿図」であった。

4．さらに，近代地図作成史という観点から「広輿図」を位置づけた場合，海野先生の最も大きな貢献は，世界における「砂漠」の地図記号としての起源がこの「広輿図」にあることを明らかにし，またそれを英語による論文を通してヨーロッパの地図史研究者に初めて伝えられたことである（「地図における砂漠記号の起源」(The origin of the cartographical symbol representing desert areas)『イマゴ・ムンデイ』誌，33巻，1981)。地図の中に「砂漠」地域を区分して描くという手法は，元代の朱思本の「輿地図」にも萌芽的に見られるものの，それを地図上の凡例「記号」として定着させたのは羅洪先の「広輿図」であり，中国における漠北のゴビ砂漠が初めて地図記号として描示されたのである。この凡例記号としての「砂漠」の描示方法は，「広輿図」がヨーロッパに伝来するとともに，それまで「砂漠」を特別な地理的地域として区分して描くという習慣を持たなかった西欧の地図作成方法の中に初めて導入されることになったし，また17世紀以降，それは世界各国の地図の中に共通した記号として普及していったのである。いわば「砂漠」の認識という点でも「広輿図」は大きな貢献をしたといえるし，また「砂漠の認識とその表現方法の統一」が16世紀の中葉に起源するものであることを，海野先生は，「広輿図」の研究過程を通じて発見されたわけである。

「広輿図」は，清時代に至る7回の改訂や覆刻を通じて，中国の国内における水利事業や漕運計画，さらに辺境における兵站の設置あるいは軍事的活動にとって極めて重要な地理的情報源として利用されたのみならず，17世紀の初期から開始されるイエズス会士を中心とする西洋の地理的知識の普及，あるいは近代的測量技術に基づく地図作成事業（「康熙図」）の展開過程においても重要な情報源として利用された。さらにまた，この「広輿図」は，国家の強力な西洋化推進運動（洋務運動）に伴う西洋の測量方法および地図作成技術の導入，あるいは教育課程における西欧の地理的知識の導入にも拘らず，19世紀の末期ごろに至るまで，中国の民衆や地方官僚にとっての最も重要な地理的情報源であり続けたのである。そういった意味で，「広輿図」は，西欧人による地図作成事業が開始される以前における中国の伝統的な地図学の最良の部分を集大成した最も精密で重要な世界地図帖という性格を有していた。海野先生は，こうした「広輿図」のもつ歴史的意義を，長年にわたる丹念な種々の諸版本の収集と比較，さらに綿密な史料批判を通じて明らかにされたのである。

V．地図文化交渉史研究 — 日本・朝鮮・中国とヨーロッパ間における地図情報の交流 —

海野先生の研究の中で，「地図文化交渉史」研究は，最も重要な位置を占めている。「広輿図」研究が，単に中国の地図史研究という枠組の中に収まらなかったように，それは，近世の日本，李朝時代の朝鮮，さらに16－18世紀のヨーロッパ諸国との地図的情報の交流という視野をもつものであったからである。こうした視点は，中国と日本，中国と朝鮮，中国と

東南アジア，中国とヨーロッパ諸国という交渉史だけでなく，朝鮮と日本，朝鮮とヨーロッパ，さらに日本と東南アジア，日本とヨーロッパ諸国といった多角的な交渉史のマトリックスの中で，それぞれの地域における地理的情報や国家の地図を取り扱うということである。それは，人類学者の用いる概念を借りるとすれば，「コンタクト・ゾーン」での地図分析といえるものである。本来，伝統的な地図の表現は，近代的測量技術の普及する以前にあっては，その地域の宗教的イデオロギーも含めて，自国あるいはその地域のアイデンテイテイを保障する形で描かれるのが一般的であった。地図の中で，それは「中心と周辺」という表現面の分節化の過程で，伝統的価値と周辺的価値が視覚化されていく。しかし，大航海時代以降，近代国家の形成と測量技術を背景とした国土の把握という段階に至るまでの時期にあっては，世界の様々な地域で，スケールを異にする新たなる「コンタクト・ゾーン」が形成されていった。それぞれの地域において，伝統的に維持されてきた価値と周辺的な価値との間に急速な流動化が生じていくのである。西洋諸国における新たな東洋の地域認識であり，またアジア諸国における西洋的価値の受容といった側面が，地図分析においても避けられない課題となっていく。

海野先生の晩年になって集大成された3部作の中で，『東西地図文化交渉史研究』が28の論文を収録し，718頁に及ぶ大著となっているのもそのためであろう。この著書の中で，こうした「コンタクト・ゾーン」ともいうべき概念は，地図情報の交流の過程を，「東漸篇」(Ⅰ)(Ⅱ)，「西漸篇」(Ⅰ)(Ⅱ)，というように，大きく2つに区分されながら示されている。すなわち，ヨーロッパ諸国あるいはイスラム圏から東アジアへ（「東漸篇」，19論文），アジアからヨーロッパ諸国へ（「西漸篇」，9論文）という地図情報の相互の流れとして整理されている。そこには，いわば，一枚の地図あるいはその諸系統図が，複数の地域あるいは異なった文化圏から由来する地理的知識や世界像・地球観を基盤に構成された「ハイブリッド」な存在であることが，特徴的に示されることになる。この著書に収録された28の論文について，こうした視点からすべてにわたって解説することは，紙面の関係からも困難であるが，『東西地図文化交渉史研究』に収められた数多くの論考は，こうした「コンタクト・ゾーン」で発生する「ハイブリッド」で，しかも様々な表現様式を同時に含む世界地図，海図，地球儀や天球儀などに焦点が絞られているともいえよう。

「東漸篇」(Ⅰ)には，「『峡西四鎮図説』所載西域図略について」（『東洋学報』，74－3・4，1993）のように，中国の辺境を描く「西域図誌」にみられるイスラム地図の影響を指摘する論考を別にすれば，「明・清におけるマテオ・リッチ系世界図」（『新発現中国科学史資料の研究』，1985），「耶蘇会士畢方済の世界図」（『人文地理』16－3，1964），「湯若望および蔣友仁の世界図について」（『人文地理学の諸問題』，1968）などのように，イエズス会が中国に齎した西洋製の世界地図や地球儀・天球儀，あるいは地理的知識の影響を検討する論

考からなっている。「東漸篇」(Ⅱ)には，日本における「南蛮系世界図」，「南蛮屏風」，「万国総図」，さらに「カルタ」とよばれた「ポルトラーノ海図」，「地球儀・天球儀」，「世界民族図譜」などをめぐる15編の論文が収録される。「西漸篇」(Ⅰ)では，「バーロス『アジア十巻書』所引のシナ刊コスモグラフィアなるものについて」(『東洋学報』，66巻，1985)，「16・17世紀における西洋製地図上の朝鮮」(前出，1987)，「地図における砂漠記号の起源」(前出，1981)，「西洋地図学史上のチアマイ湖」(The Asian lake Chiamay in the early European cartography. *Imago et mensura mundi,* 1985)，「東洋文庫所蔵マルチーニ『新シナ図帳』四種」(『東洋文庫書報』，15号，1984) など6編が含まれる。そして，「西漸篇」(Ⅱ)には，「西洋製初期日本図の系統分類」(『外国人による日本地域研究の軌跡』，1984)，「西洋地理学史におけるガスタルデイ型日本の登場」(『地域 — その文化と自然 —』，1982)，「シーボルトと『日本辺界略図』」(『日本洋学史の研究』，Ⅴ，1979) の3編を収載するが，それは，「ヨーロッパにおける日本の国土認識の変遷」あるいは「ヨーロッパ人のイメージした日本の地理像の変容」ともいえるテーマを取り扱ったものである。

こうした数多くの論考の中で，注目に値するのは，「東漸篇」(Ⅱ)に収録されている「『日本カルタ』の出現と停滞」(『洋学』9，2001) と「正保刊『万国総図』の成立と流布」(『日本洋学史の研究』10，1991)，そして「西漸篇」(Ⅰ)に含まれる「西洋地理学史上のチアマイ湖」(前出，1985) であろう。海野先生のこれまでの地図分析の経験と東西に亘る地図史的知識を背景とした蘊蓄が傾注されている論文だからである。

「『日本カルタ』の出現と停滞」の論考では，日本に残存する多くの諸本を比較検討する中から，日本製の海図 (「カルタ」) が，近世の鎖国体制の中にあっても数多く作成され，それが広く民間にまで流布していった理由を，測量術の伝授が終了したことを証明する作品として「日本カルタ」が作成されたものであったと結論つけながら，次のように指摘されている。

「日本カルタは，南洋カルタとは異なって，最初から航海用ではなかったことになる。…本来航海用であったはずのポルトラーノが，日本カルタの場合は陸図として意識されていたことを物語っている。古来の日本全図と異なる点は，わずかに緯度目盛と方位線網が余分に備わっているに過ぎないという認識があったのかもしれない。それにしても，人々が日本カルタに求めたのは何であったのだろうか。恐らく，その精細な海岸線の表現と地点間の方位的関係を知る容易さが歓迎されたものと思われるが，それ以外に注目すべきは，測量術の伝授がその存続に関与していたことである。…(細井広沢『秘伝地域図法大全書』(1717) の測量術伝授に関する記事に見るように) 測量術伝授が完了したことを示す品として手渡された三枚のカルタのうちの一つが，「日本正図」すなわち日本カルタなのである。陸地を対象とする測量術の習得完了を証明する品として，南洋カルタ (咬瑠海上分度図) や日本カルタ

が用いられているのは，江戸時代の洋式測量術の発端が西洋の航海術にあったことを物語るものであって，いわば陸に上がった航海術だったのである。…資格証明の品である以上，内容の精度向上が度外視されていたとしても，それは当然と言えるであろう」(『東西地図文化交渉史研究』，2003，295－296頁)。

この「日本カルタ」に関する分析と類似する手法によって議論されたのが，「正保刊『万国総図』の成立と流布」の論文である。様々な「万国総図」の諸本を比較しながら，「万国総図」も「日本カルタ」と同じように，それが測量術の習得完了を証明する作品であったと同時に，初期の手書きの「万国総図」が，長崎を中心に製作され，その中心にいた測量家，小林謙貞に学ぶ生徒達の「卒業制作」の過程で生み出された学習用世界白地図に近い，ある意味で，半製品であったことを明らかにされた。

「『正保　酉』刊『万国総図』の墨書地名は，林先生もしくは小林謙貞による西洋地図からの音訳以外の何物でもあるまい。測量術受業生は，師の手許にある手本をみるか，あるいは口述を筆記するかして，準白地図としての世界図に地名を記入し，卒業に際しては，「密附諸品」のひとつにもなる重要な作品として，着彩にも注意を怠らなかったであろう。刷り上りのままでは半製品と言える「正保　酉」刊『万国総図』こそ，学習を兼ねた卒業制作に使われることを念頭に置いた刊行物であり，小林謙貞の測量家養成の経験の中から生まれ出たものと断定して差し支えないであろう」(『東西地図文化交渉史研究』，2003，347頁)。

こうした海野先生の地図分析や解釈の方法は，一枚の地図が歴史時代のどの時点で，どのような状況の中で製作され流布して行ったかを，日常的な地図製作の現場まで下ろしながら議論していく視野を私達に教示してくれるものである。

この2つの論文に対して，「西漸篇」(Ⅰ)に所収された「西洋地図学史上のチアマイ湖」の論文は，前述の2つの論文がミクロなレベルにおけるリアリテイを追求するものであったのに対し，いわば，コスモロジー（宇宙観）のレベルでの虚構とリアリテイの「ハイブリッド」の問題を探った論考である。17・18世紀の西洋製地図のアジア東南部の内陸部に，インドシナ地方を流れる4本の大河の源として大きな湖が描かれるようになる。それが「チアマイ湖」と名づけられた架空の湖である。この「チアマイ湖」は，16世紀中葉のバーロスの『アジア十巻書』に登場するが，そのチアマイ湖伝承が，本来，インドシナ地域で普及していた仏教の説く世界地理観のなかの「無熱脳池」(アナヴァタプタ湖）とそこから流れ出す4つの大河をモデルに作り上げられたものであったが，それが17世紀から18世紀のヨーロッパ地図学では，実在の湖として描かれたのである。この論考は，海野先生のかつての論文「崑崙四水説の地理思想史的考察 ― 仏典及び旧約聖書の四河説との関連において ―」(『史林』41－5，1958）と共通するモチーフながら，「地図史的」分析においては，また異なった側面に注意を喚起された。

「マルチーニは1655年刊の『新シナ図帳』において，この湖の名を Kia としているが，これはマテオ・リッチの世界図におけるこの湖の名の「加」に基づいたものである。リッチは Chiamay をラテン語読みにして，語頭の Chia の音のみを漢字に置き換えたのであったが，マルチーニは漢字の「加」のシナ音をローマ字化したわけである。要するに，マルチーニの地図における Kia 湖は，アジアからヨーロッパへ，ヨーロッパからアジアへ，さらにアジアからヨーロッパへと一往復半した地理的知識の帰結なのである。チアマイ湖およびそれを源とする四大河は，インドでの空想的地理観が，インドシナ地方においてやや変形された後，ヨーロッパには地理的現実として伝わったものだったのである」(『東西地図文化交渉史研究』，2003，626頁)。

ここでは，ひとつの地理的情報が「伝承」から「実在」へ，さらに「実在」から「虚構」へと揺れ動く流れが捉えられていると同時に，それが，アジアからヨーロッパへ，そしてヨーロッパから再度アジアへ，そしてさらに，アジアからヨーロッパへという地理的知識の循環過程の中で，マクロなリアリテイが追求されていった状況が的確に指摘されている。「コンタクト・ゾーン」は，相互の地図情報を虚実相混ぜながら，繰り返し往復させていく場でもあったのである。

Ⅵ　結びにかえて —「東洋地図学史」の構想 —

海野先生の「東洋地図学史」研究の構想に関する端緒は，すでに一連の「仏教系世界図」研究の中にも十分認めることが出来るが，明確にその構想が意識されている論考は「天理図書館所蔵の大明国図について」(『大阪学芸大学紀要』第6号，1958) であろう。いわば「東洋における世界地図史」という枠組みである。そこにおいて用いられている「世界」という言葉は，西欧の測量術によって把握された実在の地上世界という意味以上に，仏教的世界，イスラム的世界，あるいは道教的世界，さらに神道の描く世界，といった宗教的世界観を背景にしたコスモロジーという含意を強く持っていたと思える。そしてそれは，アジアにおいて様々な地域に住む人々の生活を支える宗教的アイデンテイテイが地理的情報を位置づける大きな枠組みとして機能しているという状況を深く考慮しての判断であったであろう。こうした視点が，海野先生の「東洋地理学史」研究，あるいはまた「東洋地図学史」の中に，底流において，「思想史」という文脈が介在し，また深く浸透していた理由でもあったし，さらにその点が海野先生の「地図史研究」を独自なものにしていった大きな要素であったろうと思う。

1990年代になって，海野先生は「東洋地図学史」と題する展望論文を『科学史研究』(177号，1991，「補遺」185号，1993) に始めて発表された。そこには，海野先生の構想の基本的枠組みが示されている。

「本稿で用いる『地図学』はどちらかと言えば，原義の『地図作り』に比重がかかっている。従って，本稿の表題『東洋地図学史』を厳密かつ丁寧に言えば，『東洋における地図作りの歴史』であって，作成地の如何を問わない。東洋地図の変遷，つまり『東洋地図史』ではないのである。この点，漢字文化圏でのこれに関する用語使用の歴史は浅く，『地図史』と『地図学史』との区別が明確でない。ところで，対象となる東洋の範囲であるが，ここではアジアの同義語と解して，アジアの諸国・諸民族が古来作ってきた，言わば土着地図についての研究史を展望する。…また，西洋地図学史上の東洋地図は，本来ならば対象外の扱いを受けることになるが，東洋の土着地図なくしては成立しない場合もあるので，そのような地図を問題にする文献は必要に応じて取り上げるであろう。…アジア諸国における地図作りの歴史を，世界史的視野において捉えるとき，西アジアの扱いが問題となる。なぜなら，そこはバビロニアの例でも明らかなように，むしろ西洋地図学史の源流としての役割が大きく，また中世においては，その地は逆にギリシャ科学直系のイスラーム地図学の発祥地でもあったからである。しかし，西アジアは古来，乾燥アジアに展開する遊牧文化圏の重要な構成部分であり，ヨーロッパにおけるイスラーム文化圏はともかくとしても，西アジアでの地図学までも西洋地図学史の領域に帰属させるのは妥当でないと判断して，ここに扱うことにした。また，いうまでもなく日本語の『地図』は一般的に陸図だけでなく，海域の図（海図）も含めての総称であり，地図文化の地域区分に当たっては，海洋文化圏を念頭に置く必要がある。こうした観点から，本稿の記述は，西アジアを起点とし，インド洋文化圏を東へ進み，東南アジアを経て東アジアに至り，そこから内陸に入って，アジア一巡の旅を終えることとする。ところで，以下用いる「シナ」「朝鮮」「インド」などは，それぞれ古今を通じての文化圏に対する呼称であり，政治区画を意味するものではない」（『東洋地理学史研究・大陸篇』，2004，304－305頁）。

この文章の中から読み取れる「東洋地図学史」の中で取り扱うべき「地図」とは，基本的に，「アジアの諸国・諸民族が古来作ってきた土着地図」であり，西欧の地図学の中で描かれてきたアジアの地図（「東洋地図」）ではないということである。こうした観点は，すでに「インド地図学史に関するシルカルとフィルモアの労作」（『史林』51(5)，1968）の中でも，明確に指摘されていた。それは，インドの植民地化にともなうイギリスのインド測量局による国土の測量とその地図化の進展によって，インドの民衆の意識の中から次第に排除されていったヒンヅー教あるいはバラモン教，さらにその他のローカルな地域の伝統的思想と結びつく「土着地図」の発掘およびその復元作業に従事したフィルモアらの研究を高く評価したものであった。いわば，こうした「土着的地図」の発掘とその復元作業が，インド独立後のポスト・コロニアル状況の中で，インドの歴史的アイデンテイテイと新たなる国土認識を再構築する過程の一環として行われたということである。西欧の植民地化を経験してきた

アジアの多くの地域の中で，「東洋地図学史」を構想するということは，こうした視点を欠落させては成り立たないのである。海野先生は，決して声高ではなかったが，この点を明確に意識されて「地図学史」の研究を進められたのである。

このように，海野先生が「東洋地図学史」研究として構想された主題とその取り扱う地域的範囲は極めて広く，またアジアにおける「土着的地図」のもつ独自の性格をめぐっての探求も，宗教と伝統的な地理的知識との結びつき，地図的表現にみられる絵画的形象の独自性，西欧の地理的知識や測量術との対応関係など多方面に亘る。このアジアにおける「土着的地図」の探求に関しては，海野先生の "Cartography in Japan" (pp.346-477) の論考を収めた，J. B. Harley and D. Woodward (eds.), *Cartography in the Traditional East and Southeast Asian Societies* (The History of Cartography, Vol.2, Book 2), Chicago: University of Chicago Press, 1994, 970p.) などの著作の刊行にも見られるように，最近になってやっと，世界の地図史研究者の関心が向けられるようになってきた分野である。しかし，アジアの数多くの地域に残されているローカルな環境の中で作成され，しかも生活に密着しながら利用されてきた伝統的な地図の収集，あるいはそれに関する資料の発掘は，まだ十分に進んではいないのが現状である。S. Gole, *Indian Maps and Plans: From Earliest Times to the Advent of European Surveys* (New Delhi: Manohar Publication, 1989) などの研究は，こうした流れに沿って，インドの各地に残る「土着的地図」を集大成した大きな成果であったし，またその後の研究にも大きな刺激を与えた作品である。海野先生も晩年になって，「タイの伝統的海図」(『しにか』６－２，1995「地図に描かれたアジア」特集号)，あるいは「アジアの地図文化 ― 南・東南アジア ―」(『地図の文化史』1996) などの論考に見られるように，意識して，中国・朝鮮半島地域以外のタイ，ビルマ，インドネシア，インドやカシミール地域など，これまで日本では十分に知られていなかった南アジアや東南アジアの土着的地図に関する資料の収集とその紹介に努力されてこられたし，さらに，「近世トルコの世界地図」(『地図情報』25－１，2005) などの論文に見られるようにイスラム地図学史にも関心を広げられていた。

海野先生の地図学史的研究の核心部分には，自らも明らかにされてきたように，海洋的視野をも含めた「文化圏」間の地理的知識の交流を取り扱うというマクロな地図学史の構想があるが，こうした研究の視点には，「国家」領域の枠内での地図学史，あるいは「伝統的でローカルな地域の地図学史」といった側面とは，ある意味で，基本的に異なる独自の視野の広がりと膨らみがある。しかし，こうした海野先生の「東洋地図学史」研究の構想を後世の研究者が，個人として，自らの研究の基本的枠組みの中に摂取していくためには，現在の学問的な状況の中にあって，大きな困難を伴う要素もあるように思える。そこには学問の分業化が進み，近年，それぞれの分野での研究の課題の細分化と分岐が著しくなり，それぞれの

分野を超えた相互の研究の交流が難しくなってきたことと深く関係する側面があるようである。日本の地理学史あるいは地図学史研究を進めるにあたって，そこに底流としてかって存在してた「漢籍」を中心とする「東洋学」に関する基本的理解，そのための基本的知識と教養の蓄積という学問的伝統が，戦後の世代の研究者には基本的に受け継がれにくくなってきたことと係わっているように思える。日本の地図学史研究が，今後，世界の地理学史研究あるいは地図学史研究の中で重要な位置をしめていくためには，海野先生が生涯にわたって構想してこられた「東洋地図学史」研究の内実をつぶさに検討し，またその問題として提起された課題を，日本史や東洋史研究者あるいはヨーロッパの研究者などとの共同研究を進めながら，少しでもアジアにおける「土着的地図」の発掘とその意義づけに関する研究を展開していく必要があるのではないかと思う。東洋史においても，H. Futaki and A. Kamimura (eds.), *Landscapes reflected in Old Mongolian Maps* (Tokyo University of Foreign Studies, 2005, 216p.) のような地図史と関係の深い著作が刊行されている。地図史への関心が広がって来ていることを示すものであろう。

2006年11月4日に，大阪大学の待兼山会館において「海野一隆先生を偲ぶ集い」が開催され，地理学者，地図史研究者だけでなく東洋史研究者など30名近くの人々が集まって生前の海野先生と係わる個人的な思い出，あるいは先生の研究の意義，そして先生の教育や教師像などの側面が多くの人によって感慨深く語られたが，注目されたのは，海野先生の研究が日本の洋学史研究者だけでなく，東洋史研究者の間でも高く評価されているということであった。斯波義信氏（東洋文庫理事長，文化功労者）は，関西における歴史地理学の伝統と地図学史研究との結びつきの由来，さらに海野先生と東洋文庫にあるモリソン文庫との深い関わりなどについて語られたし，東洋史研究者の森安孝夫氏（大阪大学）は「唐代の仏教的世界地理」と題して，海野先生の「仏教的世界図」や「世界区分説としての四主説」などの研究のもつ先駆性を指摘された。海野先生の研究が，こうして「地理学史」あるいは「地図学史」という枠にとどまらず，学問分野をこえながら，東洋史研究の中にも大きな影響を及ぼしていることを改めて感じたのである。これからも

海野先生の思い出を語る川村博忠東亜大学教授
（海野一隆先生を偲ぶ集い，2006年11月4日，大阪大学待兼山会館）

海野一隆先生の「東洋地理学史」あるいは「東洋地図学史」研究が，改めて，学際的にそれぞれの学問分野の抱える課題と付き合わせながら，より深く探求され，受け継がれていくことを心から期待したいと思う。

なお，この解題を草するにあたり，本来であれば，海野先生のそれぞれの原著論文と対照しながら，その引用頁などを付すべきであったと思うが，しかし，晩年に刊行された先生の3部作に収録されている論文について見ると，すべての論文に亘って，先生の加筆や修正が加えられている。そのために，この解題における引用は，すべて海野先生が修正された後の文章に基づいている。この点，何卒ご了解をお願いしたい。

付記：本稿の本文は久武哲也が執筆し，著作目録は鳴海邦匡・堤　研二・小林　茂が編集した。本文ならびに著作目録は一体として取り扱われるべきものと考え，上記4名の共著とすることにした。

Kazutaka UNNO (1921-2006) and His Works on the History of Cartography

Tetsuya HISATAKE, Kunitada NARUMI,
Kenji TSUTSUMI and Shigeru KOBAYASHI

Kazutaka Unno (1921-2006) was engaged for many years in the study of the history of cartography in East Asia: Japan, China and Korea. Although his key works were collected in the recently issued three major books, *Monographs on the History of Cartographical Exchange between the East and the West* (『東西地図文化交渉史研究』2003, 718p.), *Monographs on the History of Geography in the East: Continental Asian Societies* (『東洋地理学史研究・大陸篇』2004, 352p.) and *Monographs on the History of Geography in the East: Japanese Society* (『東洋地理学史研究・日本篇』2005, 625p.), some of the important papers were not included in these volumes. In addition to *the Old Japanese Image of the Earth* (『日本人の大地像』) published posthumously in December, 2006, *the Place of Kuang-yü-t'u in the Cultural History of Maps* (『地図文化史上の広輿図』) is expected to be published by the Research Department of the Toyo Bunko (Oriental Library).

Unno's works are composed of four fields. The first is the research associated with Nobuo Muroga on the Buddhist world maps in Japan, to which the Imago Mundi Prize was awarded by the International Council of the History of Cartography in 1963. He ex-

tended his perspective on the study of Buddhist cosmology to the mutual relationships between religious view and cartography, in particular, concerning the Japanese and Korean acceptance of the Western view of the earth and globes.

The second is research on the history of cartography of China and Korea. He discussed not only the influence of Islamic maps on Chinese maps, but also the merging nationalistic world map (天下図) into the traditional Korean world maps of the Yi-Dyansty in reaction to the introducing the Western world maps during the 17th century.

The papers to be included in *The Place of Kuang-yü-t'u in the Cultural History of Maps* comprise the third field. The Kuang-yü-t'u (広輿図) was an atlas of China and its surrounding areas originally published in the middle of the 16th century. According to Unno, it was revised several times and brought into Europe as the major source of geographical information concerning East and Central Asian regions. His original contributions to the cartographical knowledge are also delineated in a paper published in Imago Mundi (1981) on the origin of scattered dots representing desert areas as cartographical symbol. He argued that this kind of map symbol originated in that of Kuang-yü-t'u and was soon adopted by Western cartographers.

The final or fourth field contains the themes discussed in the papers collected in the *Monographs on the History of Cartographical Exchange between the East and the West.* Unno classified this voluminous work into two parts. In the first part the influences of the Western cartographies on East Asian maps were examined, whereas the incorporations of geographical information of inner Asia by Western cartographers were analyzed in the second part.

Reviewing his works, the authors were impressed by the extent of Unno's research sphere on the history of cartography of East Asia. His works are remarkable not only in the field of history of geography and cartography but also oriental history and the cultural history of the cartographical exchange between the East and the West as well as of the devices of map-making in East Asia.

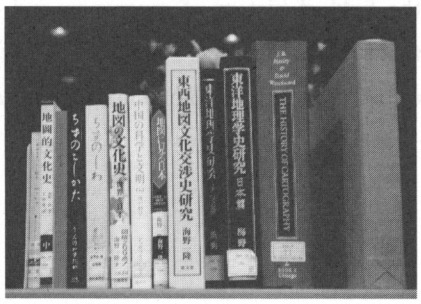
海野一隆先生著作目録

ここに掲載するのは海野一隆先生の著作目録である。この著作目録の作成にあたっての経過および使用した資料について，簡単に述べておきたい。

2006年5月8日，大阪大学大学教育実践センター総務係から連絡があり，名誉教授の海野一隆先生が逝去されたので，叙位のための書類を準備するようにとのことであった。ご遺族と連絡をとりつつ，すぐに業績目録の作成を開始した。このもとになったのは，海野先生の叙勲の時に作成された業績目録で，論文は1984年まで，著書は1996年まで記載されていた。これに以後の業績を追記し，功績調書とともに5月11日に事務側に提出することとなった。それに際しては，大阪大学所蔵の海野先生のご著書のほか，インターネットの MAGAZINE-PLUS なども検索した。

5月13日には名張のご自宅を訪問し，海野先生の書斎にあった，大阪大学退官時の著作目録（「海野一隆教授略歴・著作目録」『大阪大学教養部研究集録（人文社会科学）』33輯84－89頁，1985年1月）に先生が加筆されたものを，ご遺族の許可を得て複写させていただいた。ただしこれは先生のお仕事の全体を網羅しておらず，『ちずのしわ』（1985年）・『ちりもつもりて』（1992年）・『ちずのこしかた』（2001年）・『東西地図文化交渉史研究』（2003年）・『東洋地理学史研究　大陸篇』（2004年）・『東洋地理学史研究　日本篇』（2005年）の初出記録や「雑誌記事索引」も参照することになった。上記叙勲時の業績目録はページ数の記載を欠き，退官時の著作目録に追記された著作についても同様で，かなりの雑誌論文・辞典項目については，現物にあたることになった。ただし初期の著作の多くはこれが困難で，ページの記載のないものがすくなくない。なお，大阪学芸大学時代の著作のうち『地理学報』などに掲載のもののページ数については，大阪教育大学の前田昇名誉教授・今里悟之助教授のお世話になった。

ともあれ，海野先生はご自分の著作をまとまったものとして後世に残したいという強固なご意志をお持ちだったようで，かなりの部分は上記6冊のご著書によってカバーできるようになっていると考えられる。また，未刊のままにのこされた2冊の書物の原稿のうち，一方は『日本人の大地像』として大修館書店から2006年12月に刊行され，もう一方は『地図文化史上の広輿図』として，財団法人東洋文庫からの刊行に向け，現在要木佳美さんによって編集がすすめられている。こうした点からしても，この著作目録は完結したも



海野先生の主要著作
（このほかにも『日本古地図大成』など大部の図録がある）

のではないことをおことわりしておきたい。

以上の作業には，鳴海・堤・小林があたったが，大阪大学人文地理学教室大学院生の池中香絵さん，同卒業生の三木和美さん，同非常勤職員の稲熊めぐみさんのお世話になった。記して感謝したい。

1940年

海野一隆「(俳句) 球磨川下りほか」『七高東寮々報』17号，1940年6月（『ちりもつもりて』1－2頁所収）

海野一隆「(短歌) 競漕の日」『水すまし』(七高東寮詩歌研究会) 1号，1940年10月（『ちりもつもりて』2－3頁所収）

海野一隆「(俳句) 旅」『啓明』(七高文藝部) 101号，1940年10月（『ちりもつもりて』3－4頁所収）

海野一隆「(短歌・俳句) 民族の感激」『水すまし』(七高東寮詩歌研究会) 2号，1940年11月？（『ちりもつもりて』4－5頁所収）

海野一隆「部生活」『弓友』(七高造士館弓友会) 9号，1940年12月（『ちりもつもりて』6頁所収）

1941年

海野一隆「薩南七高造士館生活」『向上報国会誌』(福岡県築上中学校) 16号，1941年8月（『ちりもつもりて』6－11頁所収）

海野一隆「塾」『玉觥』(第七高等学校造士館東寮) 15号，1941年12月（『ちりもつもりて』11－15頁所収）

1942年

海野一隆「(短歌) たたかひ」『七高報国団団報』6号，1942年1月（『ちりもつもりて』16頁所収）

海野一隆「新酒古き皮嚢にもり ― 若き七十の東寮魂に寄す ―」『七高東寮々報』19号，1942年7月（『ちりもつもりて』17－20頁所収）

海野一隆「無題」未発表，1942～1943年稿（『ちりもつもりて』20－22頁所収）

1947年

海野一隆「一つの世界へ」『人文』(岐阜県大垣中学校人文談話会) 1号，1947年7月（『ちりもつもりて』23－25頁所収）

海野一隆「白線帽の思ひ出」『いづみ』(岐阜県大垣中学校文芸部) 1号，1947年7月（『ちりもつもりて』25－27頁所収）

海野一隆「(創作) いのちこひしき」『いづみ』(岐阜県大垣中学校文芸部) 2号，1947年10

月（『ちりもつもりて』28－32頁所収）

海野一隆「眼を大きく開いて — われらの世界的視角 —」『人文』（岐阜県大垣中学校人文談話会）2号，1947年11月（『ちりもつもりて』33－38頁所収）

1949年

海野一隆「大阪第二師範学校五月が丘寮寮歌」1949年（『ちりもつもりて』38－41頁所収）

1950年

海野一隆「（創作）あの日々（峠宗太郎）」『阪急日日新聞』235－238号，1950年4月（『ちりもつもりて』41－49頁所収）

海野一隆「西濃水運の地域的構造」『人文地理』2巻4号，27－39頁，1950年10月

海野一隆「中国地理学史における読史方輿紀要の位置」『地理学報』1号，10－14頁，1950年11月

海野一隆「経済地理学の領域（C.E. Jones and G.G. Dankenwald, *The Field of Economic Geography* 第1章の抄訳）」『地理学報』1号，21－31頁，1950年11月

1951年

海野一隆「（海外文献抄録）H.J.ウィーンズ，蜀道」『人文地理』3巻2号，96－97頁，1951年4月

海野一隆「ゲオポリティークのこと－Fifield & Pearcy（共著）Geopolitics を読んで－」『地理学報』2号，47－50頁，1951年5月（『ちりもつもりて』50－54頁所収）

海野一隆「ある夜話」『大阪学芸大学新聞』11号，1951年9月（『ちりもつもりて』55－56頁所収）

1952年

海野一隆「国際連合と地図 — 現代地図学 —」『地理学報』3号，26－29頁，1952年3月

海野一隆「地理学者の三つの型」『地理学報』3号，1952年3月（『ちりもつもりて』57頁所収）

海野一隆「公開通信簿」『大阪学芸大学新聞』（池田分校）4号，1952年5月（『ちりもつもりて』58－59頁所収）

海野一隆「（俳句）南河内の野をゆきて他」『俳句会』（大阪学芸大学池田分校俳句同好会），1952年5月（『ちりもつもりて』60－64頁所収）

海野一隆「地理学の学び方」『フロンティア』（大阪学芸大学池田分校地理学会）2号，1952年7月（『ちりもつもりて』64－66頁所収）

海野一隆「資料（アジア）二つの中国地図帖」『人文地理』4巻4号，352－354頁，1952年10月

1953年

海野一隆「資料（アジア）戦後の東亜米作地域　A.D.C.ペターソン」『人文地理』4巻6号，

516－518頁，1953年2月

海野一隆「地理と文学」『フロンティア』（大阪学芸大学池田分校地理学会）3号，2－4頁，1953年3月（『ちりもつもりて』67－69頁所収）

海野一隆「読史方輿紀要とその地域論」『史林』36巻3号，274－288頁，1953年9月

海野一隆「（書評）A.E.ムーディー：政治にひそむ地理」『地理学報』4巻，40－41頁，1953年10月

海野一隆「模型地図による地理教育」『教材教具』11月号・12月号，1953年11・12月（『ちりもつもりて』69－74頁所収）

1954年

海野一隆「中国古代地理思想考 ― 空間認識を中心として ―」『大阪学藝大学紀要』2号，1－20頁，1954年3月

海野一隆「清代の大運河と江南」『地理学報』5巻，12－17頁，1954年3月

海野一隆「ゼオガラヒー」『フロンティア』（大阪学芸大学池田分校地理学会）4号，1954年3月（『ちりもつもりて』74－76頁所収）

海野一隆「思ふこと」『日中北摂』（日中友好協会北摂支部準備会），1954年4月（『ちりもつもりて』76－77頁所収）

海野一隆「酒のない宴（水筒の焼酎）」『大阪学芸大学新聞』1954年7月（七高同窓会編『七高思いで集』後編，1963年10月所収）（『ちりもつもりて』78－80頁所収）

海野一隆「地図の精神」『フロンティア』（大阪学芸大学池田分校地理学会）5号，2－3頁，1954年11月（『ちりもつもりて』80－81頁所収）

1955年

海野一隆「有学無知」『文庫』（箕面自由学園高校自治会），1955年（『ちりもつもりて』82－84頁所収）

海野一隆「清代大運河漕運の地域的考察」『大阪学藝大学紀要』3号，124－134頁，1955年3月

室賀信夫・海野一隆「我が国における仏教系世界図の諸本」『仏教史学』4巻3・4合併号，84－96頁，1955年8月

海野一隆「古地図に見る近世に見る摂津池田」『地理学報』6巻，19－24頁，1955年10月

海野一隆「（文献紹介）J.K.ライト　E.T.プラット　地理研究のしおり」『地理学報』6号，46頁，1955年10月

海野一隆「イベリア：鉱物資源の分布と開発」原随園監修『地理と世界の歴史，ヨーロッパ篇Ⅰ』雄渾社，370－375頁，1955年11月

海野一隆「マドリッドとリスボン」原随園監修『地理と世界の歴史，ヨーロッパ篇Ⅰ』雄渾

社，423－433頁，1955年11月

1956年

海野一隆「遊牧生活」原随園監修『地理と世界の歴史，アジア篇上』雄渾社，328－336頁，1956年1月

海野一隆「青海とティベット」原随園監修『地理と世界の歴史，アジア篇上』雄渾社，434－441頁，1956年1月

海野一隆「展望（アジア）戦後刊行の外国雑誌 ― 中国の部 ―」『人文地理』7巻6号，478頁，1956年2月

海野一隆「ラッツェルと吉田松陰」『フロンティア』（大阪学芸大学池田分校地理学会）6号，1956年5月（『ちりもつもりて』84－86頁所収）

海野一隆「中国仏教における世界区分説 ― 四主説の地理的展開 ―」『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』柳原書店，106－119頁，1956年10月（「世界区分説としての四主説」として『東洋地理学史研究 大陸編』18－30頁所収）

海野一隆「資料（アジア）故王庸氏とその学史研究」『人文地理』8巻4号，294－296頁，1956年10月

1957年

海野一隆「中央アジア：気候と地形の変遷」原随園監修『地理と世界の歴史，アジア篇下』雄渾社，17－28頁，1957年1月

海野一隆「（学会展望）学史・地図」『人文地理』9巻1号，72頁，1957年4月

室賀信夫・海野一隆「日本に行われた仏教系世界図について」『地理学史研究』1集，67－141頁，1957年6月

海野一隆「南贍部洲万国掌菓之図の反響」『地理学報』7巻，1－8頁，1957年7年

海野一隆「ちりがく，塵学？地利学！」『パイオニア』（大阪学芸大学平野分校地理学研究会）1号，6－8頁，1957年7月（『ちりもつもりて』86－89頁所収）

海野一隆「（資料）中国の鉄道交通の発展」『人文地理』9巻3号，209－212頁，1957年8月

海野一隆「（書評）中国科学院中華地理志編輯部：内蒙古自治区経済地理」『地理学評論』30巻10号，991－994頁，1957年10月

海野一隆「中国（シナ）地名96項目」『世界大百科事典』平凡社，1957～1958年

1958年

海野一隆「地理関係の教養書」『フロンティア』（大阪学芸大学池田分校地理学会）7号，1958年2月（『ちりもつもりて』89－91頁所収）

海野一隆「天理図書館所蔵大明国図について」『大阪学藝大学紀要』6号，60－67頁，1958年3月（『東洋地理学史研究 大陸編』211－223頁所収）

海野一隆「崑崙四水説の地理思想史的考察 — 仏典及び旧約聖書の四河説との関連において —」『史林』41巻5号，379－393頁，1958月9月（『東洋地理学史研究 大陸編』31－46頁所収）

海野一隆「中国地理研究のために — 研究略史と最近の文献について —」『人文地理』10巻4号，297－307頁，1958年10月

海野一隆「（書評）刊行物より見た中国地理学界」『書報』10月号，1958年10月

1959年

野間三郎・海野一隆・松田信『人文地理学ゼミナール，地理学の歴史と方法，東洋篇』大明堂，1959年3月

海野一隆「民族と地歴教育」『フロンティア』（大阪学芸大学池田分校地理学会）8号，1959年3月（『ちりもつもりて』91－92頁所収）

1960年

海野一隆「池田炭」『池田市史 各説篇』133－150頁，1960年4月

海野一隆「池田地方の気候」『池田市史 各説篇』669－732頁，1960年4月

海野一隆「（学界展望）地理学史・地図」『人文地理』12巻2号，179－180頁，1960年4月

海野一隆「（書評）地理教育書三種」『地理学報』9号，35－36頁，1960年11月

1961年

海野一隆「江戸時代刊行のシナ図」『大阪学藝大学紀要』9号，129－138頁，1961年3月（シナ図に関して「江戸時代刊行のアジア諸域地図」の一応の基礎として『東洋地理学史研究 大陸編』335－424頁に所収）

1962年

室賀信夫・海野一隆「江戸時代後期における仏教系世界図」『地理学史研究』2集，135－229頁，1962年2月

海野一隆「中国（シナ）地名85項目」『アジア歴史事典』平凡社，1959年～1962年

海野一隆「（書評）J.Needham: *Science and Civilization in China*, Vol.3. その地理学地図学篇（1959年）」『史林』45巻4号，631－635頁，1962年8月

海野一隆「長久保赤水のシナ図」『人文地理』14巻3号，221－236頁，1962年6月（「長久保赤水のシナ図およびその反響」の一応の基礎として『東洋地理学史研究 大陸編』522－548頁に所収）

Muroga, N. and Unno, K., "The Buddhist world map in Japan and its contact with European maps", *Imago Mundi*, 16, pp.49-69, 1962年11月

1963年

海野一隆「（書評）カルガロワ他著柴田義松他訳：地理教授法」『地理学報』10号，67－68

頁，1963年3月

海野一隆「(資料紹介) 岸田吟香とシナ地理研究」『兵庫地理』8号，56－60頁，1963年9月（『東洋地理学史研究日本篇』125－132頁所収）

1964年

海野一隆「朱思本の輿地図について」『史林』47巻3号，416－440頁，1964年5月

海野一隆「耶蘇会士畢方済の世界図」『人文地理』16巻3号，322－326頁，1964年6月（『東西地図文化交渉史研究』93－100頁所収）

海野一隆「はかまとふんどし」『大阪大学新聞』222号，1964年6月（『ちりもつもりて』93－94頁所収）

海野一隆・斉藤晨二訳「G.B.クレッシー：五億人の土地 ― 中国の地理 ―」『アジア・アフリカ文献調査報告第66冊地理』，1964年7月

1965年

海野一隆「(学界展望) 地理学史」『人文地理』17巻2号，188－189頁，1965年4月

Muroga, N. y Unno, K., El mapa budista del mundo en el Japon y su contacto con los mapas europeos. *Publicaciones de la Real Sociedad Geografica,* Serie B, Numero 449, pp. 1-46, Madrid, 1965年6月（Imago Mundi, 16 掲載論文のスペイン語訳）

海野一隆・藤沢義之「自然環境と土地利用」『サワラク調査報告』(大阪大学ボルネオ学術調査隊編) 7－27頁，1965年10月

海野一隆・林寿一「原住民の住居と生活」『サワラク調査報告』(大阪大学ボルネオ学術調査隊編) 28－55頁，1965年10月

海野一隆「華僑 ― 人口の中心として ―」『サワラク調査報告』(大阪大学ボルネオ学術調査隊編) 56－69頁，1965年10月

海野一隆「陸ダヤ族村落覚書」『共同体の比較研究』第3輯，1965年10月

海野一隆「上海見たまま」『地理』10巻11号，56－62頁，1965年11月

1966年

海野一隆「サラワク調査旅行概要（海外調査)」『大阪大学インド東南アジア研究センター報告』3号，1－8頁，1966年3月

海野一隆「(書評) 中村拓：御朱印船航海図」『地理学評論』39巻4号，272－274頁，1966年4月

海野一隆「広輿図の諸版本」『大阪大学教養部，研究集録』第14輯，149－164頁，1966年3月

海野一隆「中国地方誌（西南)」『世界の文化地理』第1巻，講談社，1966年7月

海野一隆「人口より見たサワラク原住民」『大阪大学インド東南アジア研究センター報告

1966』173－187頁，1966年12月

海野一隆「沖縄の印象」『待陵』（大阪大学教養部報）3号，1966年12月（『ちりもつもりて』95－99頁所収）

1967年

海野一隆「婆羅洲遊記1」『地理』12巻1号，60－64頁，1967年1月

海野一隆「婆羅洲遊記2」『地理』12巻2号，42－47頁，1967年2月

海野一隆「婆羅洲遊記3」『地理』12巻3号，55－60頁，1967年3月

海野一隆「広輿図の資料となった地図類」『大阪大学教養部研究集録』第15輯，19－46頁，1967年3月

海野一隆「婆羅洲遊記4」『地理』12巻4号，48－53頁，1967年5月

海野一隆「婆羅洲遊記5」『地理』12巻5号，42－47頁，1967年5月

海野一隆「婆羅洲遊記6」『地理』12巻6号，42－47頁，1967年6月

海野一隆「婆羅洲遊記7」『地理』12巻7号，38－43頁，1967年6月

海野一隆「北京の郊外（西・南・東部）」『世界の文化地理』都市編4，講談社，1967年6月

海野一隆「婆羅洲遊記8」『地理』12巻8号，60－65頁，1967年8月

1968年

Muroga, N. and Unno, K., Los mapas del extreme oriente. *Historia de la Cartografia, Geomundo,* 7, edited by Jose Aguilar, Buenos Aires, 1968年

海野一隆「赤水のシナ図をめぐって」『地理』13巻1号，92－97頁，1968年1月（「長久保赤水のシナ図およびその反響」の一応の基礎として『東洋地理学史研究 大陸編』522－548頁に所収）

海野一隆「地理関係項目（アンドラ他7項目）」『社会科学大事典』第1巻，鹿島研究所出版会，1968年4月

海野一隆「（学界展望）学史・方法論）『人文地理』20巻2号，189－191頁，1968年4月

海野一隆「桂川甫周の世界図について」『人文地理』20巻4号，371－382頁，1968年8月（『東西地図文化交渉史研究』442－458頁所収）

海野一隆「天然冷房の高床長屋」『都市住宅』5号，1968年8月（泉靖一編『住まいの原型』鹿島研究所出版会1971年10月に収録）（『ちりもつもりて』100－106頁所収）

海野一隆「インド地図学史に関するサーカーとフィリモアの労作」『史林』51巻5号，773－784頁，1968年9月（『東洋地理学史研究 大陸編』291－302頁所収）

海野一隆・林寿一『ボルネオの人と風土一原住民の村を訪ねて一』古今書院（146頁までを執筆），1968年10月

海野一隆「湯若望および蔣友仁の世界図について」『人文地理学の諸問題 ― 小牧実繁先生

古稀記念論文集 —』大明堂，83－93頁，1968年10月（『東西地図文化交渉史研究』101－114頁所収）

1969年

海野一隆「心の触れ合いを」『たかつき』（市政だより特集号），1969年1月（『ちりもつもりて』107－108頁所収）

海野一隆『私たちの地理 — 世界史編第2巻アジア編 —』国際情報社，1969年2月

海野一隆「（書評）最近のボルネオ研究文献」『大阪大学インド東南アジア研究センター報告』6号，58－60頁，1969年3月

海野一隆「古代インド人の地理的世界観」『高校地理の動き』1969，1号，1969年4月

南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編『日本の古地図』創元社，1969年12月

海野一隆「図版解説」南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編『日本の古地図』創元社，175－192頁，1969年12月

海野一隆「水を吐く獅子頭」『大阪大学新聞』296号，1969年（『ちずのしわ』184－187頁所収）

1970年

野間三郎・海野一隆・松田信著『新訂地理学の歴史と方法』大明堂，1970年1月

海野一隆「（教室紹介）人文地理学教室」『待陵』（大阪大学教養部報）10号，1970年12月（『ちりもつもりて』109－112頁所収）

1971年

海野一隆「ボルネオ雑記」『大阪大学インド東南アジア研究センター彙報』7・8号，52－5頁，1971年3月（『ちりもつもりて』112－119頁所収）

海野一隆「史跡めぐり — 淀川筋 —」『待陵』（大阪大学教養部報）12号，1971年12月（『ちりもつもりて』119－128頁所収）

1972年

海野一隆「地理関係項目（シナを主とする）」『現代世界百科大事典』1～3，講談社，1971年10月～1972年4月

海野一隆「広輿図を模倣した地図帖－広輿考・皇明職方地図・輿図要覧について－」『大阪大学教養部研究集録』20輯，53－84頁，1972年3月

海野一隆「訪欧偶感」『兵庫地理』16号，1972年3月（『ちりもつもりて』129－147頁所収）

海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成』講談社，1972年11月

海野一隆「近世刊行の日本図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，26－30頁，1972年11月（『ちずのしわ』126－138頁所収）

海野一隆「辺境図の変遷」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，

解説』講談社，36－40頁，1972年11月（『ちずのしわ』139－156頁所収）
海野一隆「町図と道中図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，41－45頁，1972年11月（『ちずのしわ』157－172頁所収）
海野一隆「南瞻部洲大日本国正統図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，49頁，1972年11月
海野一隆「幕府撰慶長日本図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，52頁，1972年11月
海野一隆「皇圀道度図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，53－54頁，1972年11月
海野一隆「幕府撰元禄日本図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，54頁，1972年11月
海野一隆「日本分形図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，54頁，1972年11月
海野一隆「南瞻部州大日本正統図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，55頁，1972年11月
海野一隆「日本図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，55頁，1972年11月
海野一隆「改正日本大絵図，（内題扶桑国之図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，55－56頁，1972年11月
海野一隆「新撰大日本図鑑」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，56－57頁，1972年11月
海野一隆「本朝図鑑綱目」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，57頁，1972年11月
海野一隆「改正大日本全図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，57－58頁，1972年11月
海野一隆「日本分野図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，58頁，1972年11月
海野一隆「日本海山潮陸図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，59頁，1972年11月
石山　洋・海野一隆「日本辺界略図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，59頁，1972年11月
長久保光明・海野一隆「改正日本輿地路程全図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，59－60頁，1972年11月

石山　洋・海野一隆「日本輿地全図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，60頁，1972年11月

海野一隆「河内国絵図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，66頁，1972年11月

海野一隆「大和国大絵図（内題，大和国細見図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，66頁，1972年11月

海野一隆「信濃高附絵図（内題，信濃国名所古跡高附絵図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，67頁，1972年11月

海野一隆「安房国図，付安房地名考」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，67－68頁，1972年11月

海野一隆「越後国全図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，68頁，1972年11月

海野一隆「紀伊・大和・河内・伊賀・山城・伊勢六ヶ国絵図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，68－69頁，1972年11月

海野一隆「関八州輿地路程全図（内題，関東八国輿地路程全図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，69頁，1972年11月

海野一隆「伊勢国細見図（内題，文久改正伊勢国細見之図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，69頁，1972年11月

海野一隆「無人島之図（内題，無人島大小八十余山之図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，70頁，1972年11月

海野一隆「小笠原総図」」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，70－71頁，1972年11月

川崎房五郎・海野一隆「新版江戸大絵図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，74頁，1972年11月

海野一隆「肥前名護屋城図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，82－83頁，1972年11月

海野一隆「西海航路図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，89頁，1972年11月

海野一隆「木曽路・中山道・東海道絵図（袋題，従江戸伏見迄木曽路中山道東海道絵図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，89頁，1972年11月

海野一隆「西国筋海陸絵図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，89－90頁，1972年11月

海野一隆「海瀕舟行図（内題，西海行船図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，90頁，1972年11月

海野一隆「東西海陸之図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，90－91頁，1972年11月

海野一隆「東海道分間絵図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，91頁，1972年11月

進士慶幹・海野一隆「諸国道中大絵図（諸国道中記　駄賃附）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，91－92頁，1972年11月

海野一隆「南洋湊方角之図」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，92頁，1972年11月

岩田豊樹・海野一隆「富士直図（富嶽図）」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，95頁，1972年11月

海野一隆「あとがき」海野一隆・織田武雄・室賀信夫編，中村拓監修『日本古地図大成，解説』講談社，96頁，1972年11月

1973年

Nanba, M., Muroga, N. and Unno, K. eds. *Old Maps in Japan*. Sogensha, 1973年4月

海野一隆「『日本古地図絵図展』を見て」『地図』11巻2号，22－29頁，1973年6月（『ちずのしわ』65－78頁所収）

有坂隆道（校注），藪内清・海野一隆・水田紀久（注）「夢の代」水田紀久・有坂隆道校注『日本思想大系43，富永仲基・山片蟠桃』岩波書店，141－616，625－642頁，1973年8月

海野一隆「古代漢民族の地理的世界観」『東方宗教』42号，35－51頁，1973年10月（『東洋地理学史研究 大陸編』3－17頁所収）

海野一隆「たわむれの地図」『月刊古地図研究』3巻12号，1973年（『ちずのしわ』5－7頁所収）

海野一隆「地図の皺」『月刊古地図研究』4巻3号，1973年（『ちずのしわ』3－4頁所収）

1974年

海野一隆「（一部共同執筆）地図の歴史」『ブリタニカ国際大百科事典』第12巻，728－740頁，1974年4月

海野一隆「『天地二球用法国名』考」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅲ』創元社，113－137頁，1974年6月（『東西地図文化交渉史研究』420－441頁所収）

海野一隆「須弥山世界説と粟散国」田村円澄他編『日本思想史の基礎知識』182－183頁，1974年7月

海野一隆「(学界展望) 地図 (近世以前)」『人文地理』26巻3号，304－305頁，1974年8月

海野一隆「両部神道家源慶安の地球説支持と仏教界の反応」『科学史研究』112号，152－162頁，1974年12月 (『東洋地理学史研究 日本篇』62－83頁所収)

1975年

海野一隆「船越昭生：中国における世界地図 — 16・17世紀を中心として —(1974年度大会特別研究発表報告・討論の要旨および司会者の所見)」『人文地理』27巻1号，91－94頁，1975年2月

海野一隆「漢民族と砂漠」日比野丈夫『中国の歴史』講談社，第10巻月報，1－4頁，1975年2月 (『ちずのしわ』207－210頁所収)

海野一隆「広輿図の反響 — 明・清の書籍に見られる広輿図系の諸図 —」『大阪大学教養部研究集録』第23輯，1－34頁，1975年3月

海野一隆「Valk 地球儀伝来の波紋」『蘭学資料研究会研究報告』298号，291－293頁，1975年9月

織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編』講談社，1975年11月

海野一隆「東洋系世界図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，3－23頁，1975年11月

海野一隆「東亜航海図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，35－36頁，1975年11月

海野一隆「少加呂多」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，37－38頁，1975年11月

海野一隆「東洋南海航海古図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，38－39頁，1975年11月

海野一隆「『波丹人絵巻』所載東亜航海図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，39頁，1975年11月

海野一隆「『本朝天文図解』所載地球図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，47－48頁，1975年11月

海野一隆「蘭学系世界図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，51－73頁，1975年11月

海野一隆「幕末民衆の世界図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，74－82頁，1975年11月

海野一隆「クルーゼンシュテルン　日本図」織田武雄・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成，世界図編，解説』講談社，91－93頁，1975年11月

1976年

海野一隆「宗覚の地球儀とその世界像」『科学史研究』117号，8－16頁，1976年3月（『東洋地理学史研究 日本篇』488－505頁所収）

海野一隆「版図」『月刊古地図研究』7巻3号，2－3頁，1976年5月（『ちずのしわ』203－206頁所収）

海野一隆「高橋景保の見たアロースミス図」『蘭学資料研究会研究報告』309号，189－190頁，1976年8月

海野一隆「いつわりの地図」『月刊古地図研究』7巻8号，2－3頁，1976年10月（『ちずのしわ』18－26頁所収）

ジョゼフ・ニーダム著，海野一隆・橋本敬遠・山田慶児訳『中国の科学と文明，第6巻地の科学』（地理学と地図学の章）思索社，1976年12月

海野一隆「長かった道のり」ジョゼフ・ニーダム著『中国の科学と文明』思索社，月報6，1976年（『ちりもつもりて』147－149頁所収）

1977年

海野一隆「カリフォルニア半島が島になった経緯」『月刊古地図研究』8巻2号，2－4頁，1977年4月（『ちずのしわ』27－31頁所収）

海野一隆「地球儀付きのバテレン人形」『科学史研究』122号，120－121頁，1977年6月（『ちずのしわ』248－250頁所収）

海野一隆「漂流民津太夫らの帰国と地図の伝来」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅳ』創元社，101－122頁，1977年7月（『東西地図文化交渉史研究』535－553頁所収）

海野一隆「縦の教育・横の教育」『弓友憶いの記』（七高造士館弓友会），1977年7月（『ちりもつもりて』150－151頁所収）

海野一隆「きまやく山」『月刊古地図研究』8巻6号，2－4頁，1977年8月（『ちずのしわ』265－271頁所収）

Unno, K., (abstract) The Origin of the Cartographical Symbol Representing Desert Areas. *7th International Conference on the History of Cartography, Washington, D.C.*, p.4, 1977年8月

Unno, K., Concerning a MS map of China in the Bibliothèque Nationale, Paris, introduced to the world by Monsieur M. Destombes. *Memoirs of the Research Dept. of the Toyo Bunko,* 35, pp. 205-217, 1977年9月（和文を『東洋地理学史研究 大陸編』224－236頁に収録）

海野一隆「江戸鳥瞰図の創始者」『月刊古地図研究』8巻9号，2－11頁，1977年11月（『ちずのしわ』102－118頁所収）

海野一隆「シーボルトの翻訳『日本辺界略図』の諸本」『蘭学資料研究会研究報告』324号，1977年11月

海野一隆「(資料紹介) 明石市立天文科学館所蔵古地球儀について」『科学史研究』124号，235－236頁，1977年12月（『東洋地理学史研究 日本篇』603－606頁所収）

1978年

海野一隆「ヨーロッパにおける広輿図 ― シナ地図学西漸の初期状況 ―」『大阪大学教養部研究集録第』26輯，3－28頁，1978年3月

海野一隆「(講演要旨)支那地図学史上の日本」『東洋文庫書報』9号，164－166頁，1978年3月

海野一隆「天保図絵図の仕上げ費用」『月刊古地図研究』9巻5号，2－4頁，1978年7月（『ちずのしわ』119－125頁所収）

海野一隆「朝鮮李朝時代に流行した地図帳 ― 天理図書館所蔵本を中心として ―」『ビブリア天理図書館報』70号，2－28頁，1978年10月（『東洋地理学史研究 大陸編』237－265頁所収）

海野一隆「(書評) 橋本宗吉世界図の異版・偽版・模倣版」『月刊古地図研究百号記念論集』49－59頁，1978年12月（『ちずのしわ』305－318頁所収）

1979年

海野一隆「ヨーロッパにおける広輿図 ― シナ地図学西漸の初期状況 ―(承前)」『大阪大学教養部研究集録第』27輯，41－86頁，1979年2月

海野一隆「地図学的見地よりする馬王堆出土地図の検討」『東方学報』51冊，59－82頁，1979年3月（『東洋地理学史研究大陸編』118－140頁所収）

海野一隆「西洋地球説の伝来1」『自然』34巻3号，60－67頁，1979年3月（『日本人の大地像』3－17頁所収）

海野一隆「橋本宗吉世界図に利用された資料」『蘭学資料研究会研究報告』341号，1979年4月

海野一隆「西洋地球説の伝来2」『自然』34巻6号，62－69頁，1979年6月（『日本人の大地像』17－31頁所収）

海野一隆「シーボルトと『日本辺界略図』」有坂隆道編『日本洋学史の研究V』創元社，101－128頁，1979年9月（『東西地図文化交渉史研究』695－718頁所収）

海野一隆「地球説伝来異聞 ―『中国描談』の謎 ―」『自然』34巻11号，78－85頁，1979年11月（『日本人の大地像』31－45頁所収）

海野一隆「人国記の版本と地図」『月刊古地図研究』10巻9号，2－5頁，1979年11月（『ちずのしわ』95－101頁所収）

海野一隆「十人十色」『環』(蟹守歯科医院誌) 3号，1979年12月（『ちりもつもりて』153－156頁所収）

1980年

海野一隆「象徴としての地図1」『月刊古地図研究』10巻11号，2－10頁，1980年1月

海野一隆「象徴としての地図2」『月刊古地図研究』10巻12号，2－6頁，1980年2月

海野一隆「象徴としての地図3」『月刊古地図研究』11巻1号，2－10頁，1980年3月（「資格証明としての地図」と改題し上記3部を合併して『ちずのしわ』272－304頁所収）

Unno, K., Japan before the introduction of the Global Theory of the Earth: In search of a Japanese image of the earth. *The Memoirs of the Research Dept. of the Toyo Bunko,* 38, pp.39-70, 1980年6月

海野一隆「地球説伝来以前1— 日本人の大地像を探る —」『自然』35巻7号，80－87頁，1980年7月（『日本人の大地像』47－60頁所収）

海野一隆「地球説伝来以前2— 日本人の大地像を探る —」『自然』35巻8号，63－70頁，1980年8月（『日本人の大地像』60－78頁所収）

海野一隆「福島喜太郎氏所蔵屏風世界図　日本国について1」『月刊古地図研究』11巻5号，2－6頁，1980年7月

海野一隆「福島喜太郎氏所蔵屏風世界図　日本国について2」『月刊古地図研究』11巻6号，2－5頁，1980年8月（「新出現の南蛮系世界図 — 福島喜太郎氏所蔵屏風世界図日本図について —」として上記2篇を合併して『ちずのしわ』251－264頁に収録）

Unno, K., Geographical thought of Chinese people. Geography Institute, Kyoto University (ed.) *Geographical Languages in Different Times and Places,* pp.91-93, 1980年10月

Unno, K.,（「地球説伝来以前」[1980年] の英訳）A world-dividing theory originating in India. Geography Institute, Kyoto University (ed.) *Geographical Languages in Different Times and Places,* pp.110-114, 1980年10月

海野一隆「和田良信氏御寄稿のいきさつ」『弓友だより』（七高造士館弓友会）3号，1980年10月（『ちりもつもりて』157－159頁所収）

杉浦康平・海野一隆「（対談）古地図を読む — 世界図・日本図 —」『みづゑ』（春鳥会）908号，60－79頁，1980年11月（『ちずのしわ』32－64頁所収）

1981年

海野一隆「中国における歴史地図の変遷」布目潮渢編『唐宋時代の行政経済地図の作製』（科研費研究成果報告書）3－38頁，1981年3月（「漢民族社会における歴史地図の変遷」として『東洋地理学史研究 大陸編』58－109頁に収録）

海野一隆「アロースミスの太平洋図帖」『月刊古地図研究』12巻1号，2－4頁，1981年3

月（『ちずのしわ』333－338頁所収）

海野一隆「李朝朝鮮における地図と道教」『東方宗教』57号，14－37頁，1981年5月（『東洋地理学史研究 大陸編』266－287頁所収）

Unno, K., The origin of the cartographical symbol representing desert areas. *Imago Mundi,* 33, pp.82-87, 1981年7月（和文を「地図における砂漠記号の起源」として『東西地図文化交渉史研究』610－619頁所収）

海野一隆「西遊記の世界像」陳舜臣監修『西遊記の旅』（中国古典紀行3）講談社，103－108頁，1981年8月（『ちずのしわ』175－183頁所収）

1982年

海野一隆「西洋地図学史におけるガスタルディ型日本の登場」石田寛教授退官記念事業会編『地域－その文化と自然』福武書店，464－480頁，1982年3月（『東西地図文化交渉史研究』672－694頁所収）

海野一隆「洋子江」『PINUS』（雄松堂書店）4号，1982年3月

海野一隆「オルテリウスとシナ図 — 大航海時代における地図作りの舞台裏 —」『図書』（岩波書店）393号，33－39頁，1982年5月（『ちずのしわ』234－242頁所収）

海野一隆「室賀先生の訃」『歴史地理学』117号，39－40頁，1982年6月（『ちりもつもりて』159－161頁所収）

海野一隆「『つぼのいしぶみ』の正体」『PINUS』（雄松堂書店）6号，1－4頁，1982年9月（『ちずのしわ』90－94頁所収）

海野一隆「室賀信夫先生と地図学史」『地図』20巻3号，1982年9月（『ちずのこしかた』248－252頁所収）

海野一隆「鹿児島のある初期の西洋製日本地図」『弓友だより』（七高造士館弓友会々誌）5号，1982年10月（『ちずのしわ』229－233頁所収）

海野一隆「洋子江と揚子江」『近畿七高会報』10号，1982年10月（『ちずのしわ』243－247頁所収）

海野一隆「漢民族の地理思想 — 特にその地勢観について —」京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房，69－80頁，1982年11月（『東洋地理学史研究 大陸編』47－57頁所収）

海野一隆「インド人の宇宙観・中国人の宇宙観」杉浦康平構成『アジアのコスモス・マンダラ』（「アジアの宇宙観展」図録）講談社，157－159頁，1982年11月（「アジア人の宇宙観・世界観」として『ちずのしわ』188－202頁所収）

1983年

海野一隆「（資料紹介）在鎮江宋代石刻「禹跡図」観覧記，附，宋代石刻「皇朝九域守令

図」の現存」『東方学』66輯，119－127頁，1983年7月（『東洋地理学史研究 大陸編』178－191頁所収）

Unno, K., (resume) Early European cartography of Korea. *10th International Conference on the History of Cartography,* Dublin, p.5, 1983年8－9月

Unno, K., The geographical thought of the Chinese people with special reference to ideas of terrestrial features. *The Memoirs of the Research Dept. of the Toyo Bunko,* 41, pp.83-97, 1983年9月

海野一隆「漢民族の日本国土観 ― 弘中芳男氏の疑問に沿って ―」『季刊邪馬台国』17号，143－153頁，1983年9月（『ちずのしわ』211－225頁所収）

海野一隆「『武用弁略』について」『弓友だより』（七高造士館弓友会）6号，1983年10月（『ちりもつもりて』162－164頁所収）

海野一隆「韓国地図学の特色（原題ハングル）」『韓国科学史学会誌』(*Han'guk Kwakak-sa Hakhoe-Ji: Journal of Korean History of Science Society*) 5巻1号，101－105頁，1983年12月（「朝鮮地図学の特色」として『東洋地理学史研究 大陸編』195－210頁所収）

1984年

海野一隆「北島見信」日蘭学会編『洋学史事典』207頁，1984年（『ちずのこしかた』201頁所収）

海野一隆「柴田収蔵」日蘭学会編『洋学史事典』317頁，1984年（『ちずのこしかた』201－202頁所収）

海野一隆「鱸（鈴木）重岩」日蘭学会編『洋学史事典』371頁，1984年（『ちずのこしかた』202－203頁所収）

海野一隆「ファルク（Valk）父子」日蘭学会編『洋学史事典』609頁，1984年（『ちずのこしかた』206－207頁所収）

海野一隆「揚子江と洋子江」『東方学』67輯，91－103頁，1984年1月（『東洋地理学史研究 大陸編』146－159頁所収）

海野一隆「訂正（在鎮江宋代石刻「禹跡図」観覧記［1983年］についての）」『東方学』67輯，103頁，1984年1月（『東洋地理学史研究 大陸編』190－191頁所収）

海野一隆「江戸時代の本初子午線」『月刊古地図研究』14巻11号，2－4頁，1984年1月（『ちずのしわ』324－332頁所収）

海野一隆「（資料紹介）東洋文庫所蔵マルチーニ：新シナ図帖，四種」『東洋文庫書報』15号，1－20頁，1984年3月（『東西地図文化交渉史研究』628－643頁所収）

海野一隆「未知に挑む」『あぷろうち』（大阪大学探検部誌）5号，1984年5月（『ちりもつ

もりて』164－166頁所収）

Unno, K., The mediaeval Japanese view of their country. K. Takeuchi (ed.) *Languages, Paradigms and Schools in Geography,* Laboratory of Social Geography, Hitotsubashi University, pp.37-43, 1984年9月

海野一隆「（解題）藤田元春：改訂増補日本地理学史」藤田元春『改訂増補日本地理学史』復刻版，1984年10月（『ちりもつもりて』167－172頁所収）

海野一隆「埋もれている江戸時代の官撰地図」『月刊古地図研究』15巻9号，2－11頁，1984年11月

海野一隆「埋もれている江戸時代の官撰地図」『月刊古地図研究』15巻10号，10－11頁，1984年12月（上記同題と合わせて『ちずのこしかた』143－158頁所収）

海野一隆「（例会・研究部会要旨）東大寺開田図における方格と条里」『人文地理』36巻6号，565－570頁，1984年12月（『ちずのこしかた』115－118頁所収）

海野一隆「タバコ島」『近畿七高会会報』12号，1984年（『ちずのしわ』319－323頁所収）

海野一隆「石川流宣」『平凡社大百科事典』1巻，898頁，1984年（『ちずのこしかた』199－200頁所収）

海野一隆「オルテリウス」『平凡社大百科事典』2巻，1190頁，1984年（『ちずのこしかた』200－201頁所収）

海野一隆「絵図」『平凡社大百科事典』2巻，534－535頁，1984年（『ちずのしわ』81－84頁所収）

海野一隆「行基図」『平凡社大百科事典』4巻，270－271頁，1984年（『ちずのしわ』85－89頁所収）

1985年

海野一隆「西洋製初期日本図の系統分類」石田寛編『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院，105－123頁，1985年1月（『東西地図文化交渉史研究』653－671頁所収）

Unno, K., The Asian lake Chiamay in the early European cartography. *Imago et mensura mundi: Atti del IX congresso internazionale di storia della cartografia.* Istituto della Enciclopedia Italiana, Roma, 1985年（和文を「西洋地図学史上のチアマイ湖」として『東西地図文化交渉史研究』620－627頁所収）

海野一隆「『喝蘭新訳地球全図』における参照資料 ― 山村昌永の批評との関連において ―」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅶ』創元社，65－102頁，1985年3月（『東西地図文化交渉史研究』504－534頁所収）

海野一隆「バーロス『アジア十巻書』所引のシナ刊コスモグラフィアなるものについて」『東洋学報』66巻（財団法人東洋文庫創立60周年記念特輯号），87－107頁，1985年

3月（『東西地図文化交渉史研究』583－597頁所収）

海野一隆「ブリティッシュ・コロンビア大学における江戸時代地図の収集 — ヴァンクーヴァー便り　その一 —」『月刊古地図研究』16巻7号，2－4頁，1985年9月（『ちずのこしかた』86－91頁所収）

海野一隆「トスカネリ」『平凡社大百科事典』10巻，883頁，1985年（『ちずのこしかた』203頁所収）

海野一隆「ミュンスター」『平凡社大百科事典』14巻，514－515頁，1985年（『ちずのこしかた』207頁所収）

海野一隆「米国における和製地図の収集 — ヴァンクーヴァー便り　その二 —」『月刊古地図研究』16巻8号，2－5頁，1985年（『ちずのこしかた』92－97頁所収）

Unno, K., Edo map collection housed at the University of British Columbia Library: A summary of its survey and its most important maps. Unpublished report in Japanese submitted to the Japan Foundation, 86p., 1985年

海野一隆「明・清におけるマテオ・リッチ系世界団 — 主として新史料の検討 —」山田慶児編『新発現中国科学史資料の研究，論考篇』（京都大学人文科学研究所），507－580頁，1985年12月（『東西地図文化交渉史研究』33－92頁所収）

海野一隆『ちずのしわ』雄松堂，全338頁，1985年3月

1986年

Unno, K., (book review) Ingrid Kretschmer, Johannes Dorflinger und Franz Wawrik (herausgeber): Japan. *Lexikon zur Geschichte der Kartographie,* Vienna: Franz Deutike, band1, pp.357-361, 1986年

Unno, K.,(book review)Ingrid Kretschmer, Johannes Dorflinger und Franz Wawrik (herausgeber): Japanische Kartographie. *Lexikon zur Geschichte der Kartographie,* Vienna: Franz Deutike band1, pp.361-366, 1986年

海野一隆「『江戸鳥瞰図の創始者』補遺」『月刊古地図研究』17巻7号，2－8頁，1986年（『ちずのこしかた』190－195頁所収）

海野一隆「英国図書館のマップ・ライブラリ」『地図情報』6巻3号，22－23頁，1986年（『ちずのこしかた』75－78頁所収）

海野一隆「一袋の甘栗」『近畿七高会報』13号，1986年3月（『ちりもつもりて』173－175頁所収）

海野一隆「図と書」『東亜』（財団法人霞山会発行）4月号，1986年4月（『ちりもつもりて』176－178頁所収）

海野一隆「マテオ・リッチ，マルチーノ・マルチーニを記念しての3つの国際会議（海外東

方学会消息71)」『東方学』72号，160－169頁，1986年7月（『東洋地理学史研究 大陸編』340－352頁所収）

海野一隆「濁世・末世」『弓友だより』（七高造士館弓友会）9号，1986年9月（『ちりもつもりて』179－182頁所収）

1987年

海野一隆「マテオ・リッチと章潢」『東洋文庫書報』18号，106－107頁，1987年（『ちずのこしかた』228－231頁所収）

海野一隆「岡沢氏所蔵日本図屏風について」『月刊古地図研究』18巻1号，2－4頁，1987年（『ちずのこしかた』137－142頁所収）

海野一隆「石水博物館所蔵古地図展を見て」『月刊古地図研究』18巻3号，11頁，1987年（『ちずのこしかた』135－136頁所収）

海野一隆「宋版『禹貢論山川地理図』現存の意義」『東方』72号，26－28頁，1987年（『ちずのこしかた』79－82頁所収）

海野一隆「『粟散辺土』と『大日本国』— 中世日本人の国土観 —」『大阪明浄女子短期大学紀要』2号，1－17頁，1987年3月（『東洋地理学史研究 日本篇』3－26頁所収）

海野一隆「（展望）北米における江戸時代地図の収集状況－ビーンズ・コレクションを中心として－」『人文地理』39巻2号，112－137頁，1987年4月（『東洋地理学史研究 日本篇』556－594頁所収）

海野一隆「ファルク地球儀伝来の波紋」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅷ』創元社，1987年4月（『東西地図文化交渉史研究』398－419頁所収）

海野一隆「男女共便」『近畿七高会会報』14号，1987年10月（『ちりもつもりて』182－184頁所収）

海野一隆「『装剣奇賞』について」『弓友だより』（七高造士館弓友会）10号，1987年10月（『ちりもつもりて』185－187頁所収）

Unno, K., European cartography of Korea in the sixteenth and seventeenth centuries. *Han'guk Kwahak-sa Hakhoe-Ji: Journal of the Korean History of Science Sciety,* **9(1), pp.109-116,** 1987年12月（和文を「十六，十七世紀における西洋製地図上の朝鮮」として『東西地図文化交渉史研究』598－609頁に収録）

1988年

海野一隆「『イマゴ・ムンディ』誌半世紀の歩みとわが国」『地図』26巻3号，1－6頁，1988年（『東洋地理学史研究 日本編』607－616頁所収）

海野一隆「漢代の翰海」『東方』91号，2－6頁，1988年（『東洋地理学史研究 大陸編』141－145頁所収）

海野一隆「室賀先生の手紙」日本地理資料協会編刊『室賀信夫先生追悼文集』19－22頁，1988年12月（『ちりもつもりて』187－189頁所収）

1989年

海野一隆「日本において須弥山説はいかに消滅したか」岩田慶治・杉浦康平編『アジアの宇宙観』講談社，350－371頁，1989年

海野一隆「神宮文庫所蔵の南蛮系世界図と南洋カルタ」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅸ』創元社，9－36頁，1989年4月（『東西地図文化交渉史研究』189－210頁所収）

海野一隆「山田さんと私」山田信夫教授追悼記念事業会編『人と人－山田信夫先生追悼文集』213－214頁，1989年4月（『ちりもつもりて』190－191頁所収）

Unno, K., (abstract) Map as picture: The old Chinese view of maps. *13th International Conference on the History of Cartography*, Amsterdam, pp.15-16, 1989年6－7月（和文を「絵画としての地図 ― 漢民族の地図観 ―」として『東洋地理学史研究 大陸編』110－117頁に収録）

海野一隆「『こまい』『こまい』」『近畿七高会会報』15号，1989年10月（『ちりもつもりて』191－197頁所収）

1990年

海野一隆「鮎沢信太郎博士の学問」『鮎澤信太郎文庫目録』（横浜市立大学図書館）15－18頁，1990年3月（『ちりもつもりて』198－205頁所収）

海野一隆「中国の思考 ― 天と地と人と ―」内田・高橋編『都賀山』（つがやま市民教養文化講座講演要旨）（守山市野洲郡勤労福祉会館つがやま荘発行），1990年4月（『ちりもつもりて』206－208頁所収）

Kawamura, Hirotada, Unno, Kazutaka & Miyajima, Kazuhiko, List of old globes in Japan. *Der Globusfreund,* No. 38/39 VIIth International Symposium of Coronelli Society, pp.173-178, 1990年11月

1991年

海野一隆「ありし一つの世界像」『インペリアル』（帝国ホテル）92号，1991年（『ちずのこしかた』26－31頁所収）

海野一隆「無刊記『東海道路逝之図』の異版」『月刊古地図研究』22巻6号，1991年（『ちずのこしかた』164－169頁所収）

海野一隆「ハンブルク民族学博物館所蔵手書万国総図について」『月刊古地図研究』22巻8号，1991年（『ちずのこしかた』98－102頁所収）

海野一隆「正保刊『万国総図』の成立と流布」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅹ』創元社，1991年1月（『東西地図文化交渉史研究』328－383頁所収）

海野一隆「展望　東洋地図学史」『科学史研究』117号，1－14頁，1991年3月（『東洋地理学史研究 大陸編』303－330頁所収）

海野一隆「（資料紹介）異本の多い『漂民御覧之記』」『PINUS』（雄松堂書店）32号，1991年（『東洋地理学史研究 日本篇』107－115頁所収）

海野一隆「（書評）微に入り際を穿った地物の表現」『日本列島2千万分の一地図集成出版案内』「推薦の言葉」科学書院，1991年6月（『ちりもつもりて』208－209頁所収）

Unno, K., (abstract) Extant maps of paddy fields drawn in eighth-century Japan. *14th International Conference on the History of Cartography*, Uppsala and Stockholm, 1991年6月

海野一隆「知りたくない権利」『近畿七高会会報』16号，1991年8月（『ちりもつもりて』210－212頁所収）

海野一隆「地図の未来」『地図情報』11巻2・3合併号，24頁，1991年10月（『ちりもつもりて』213－214頁所収）

Unno, K., Government Cartography in Sixteenth Century Japan. *Imago Mundi,* 43, pp.86-91, 1991年11月（和文を「豊臣政権の地図調達事業」として『東洋地理学史研究 日本篇』256－266頁に収録）

1992年

海野一隆「いわゆる『根来寺伽藍古絵図』について」『月刊古地図研究』23巻8号，1992年（『ちずのこしかた』119－134頁所収）

海野一隆「『万国世界異形図』について」『ビブリア天理図書館報』9号，20－33頁，1992年10月（『東西地図文化交渉史研究』384－397頁所収）

海野一隆『ちりもつもりて（知理母都茂利天）』平安書院，全214頁，1992年10月

1993年

海野一隆「日本学士院所蔵無題東西両半球図」『洋学』（洋学史学会研究年報）1，1993年（『ちずのこしかた』，106－108頁所収）

海野一隆「古地図研究の過去・現在・未来 ― 独断と偏見をまじえて随筆風に ―」『古地図研究』（覆刻版）別巻，1－22頁，1993年（『ちずのこしかた』208－227頁所収）

海野一隆「地図学史奨学金に名を残したハーリ氏」『リベルス』（柏書房 PR 誌）9号，1993年（『ちずのこしかた』232－233頁所収）

海野一隆「『陝西四鎮図説』所載西域図略について」『東洋学報』74巻3・4号，227－263頁，1993年3月（『東西地図文化交渉史研究』3－32頁所収）

海野一隆「東洋地図学史補遺」『科学史研究』185号，1－5頁，1993年3月（『東洋地理学史研究 大陸編』331－339頁所収）

海野一隆「南蛮系世界図の系統分類」有坂隆道・浅井允晶編『論集日本の洋学Ⅰ』清文堂，9－80頁，1993年12月（『東西地図文化交渉史研究』117－175頁所収）

1994年

海野一隆「オルテリウス地図帳の表題」『學鐙』91巻8号，4－7頁，1994年（『ちずのこしかた』36－42頁所収）

海野一隆「『新製地球万国図説』（附編）所載世界図」『洋学』（洋学史学会研究年報）2，1994年（『ちずのこしかた』103－105頁所収）

海野一隆「稲垣定穀」朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』174頁，1994年（『ちずのこしかた』200頁所収）

海野一隆「新発田収蔵」朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』793頁，1994年（『ちずのこしかた』201－202頁所収）（1984年『洋学史事典』所載記事に増補）

海野一隆「長久保赤水」朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』1189頁，1994年（『ちずのこしかた』203－204頁所収）

海野一隆「沼尻墨僊」朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』1287頁，1994年（『ちずのこしかた』204－205頁所収）

海野一隆「ノルデンショルド」朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』1301頁，1994年（『ちずのこしかた』205－206頁所収）

海野一隆「樋口謙貞」朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』1366頁，1994年（『ちずのこしかた』206頁所収）

海野一隆「平安時代の地理教育」『パイオニア』（関西地理学研究会）50号，1994年（『ちずのこしかた』255－257頁所収）

海野一隆「地球儀と日本人 ― 地球説の伝来から幕末まで ―」『地球儀の世界』（土浦市立博物館特別展図録），6－11頁，1994年1月（『ちずのこしかた』61－72頁所収）

海野一隆「（書評）『琉球国絵図史料集』第一集（正保国絵図及び関連史料）」『地図』32巻1号，49－50頁，1994年（『ちずのこしかた』159－163頁所収）

海野一隆「『拾芥抄』古写本における地図（上）― 天文十七年本を中心として」『ビブリア天理図書館報』101号，2－23頁，1994年5月（下と合わせて『東洋地理学史研究日本篇』176－214頁所収）

海野一隆「倭国・ジパング・大日本 ― 地図の中の日本 ―」『ビブリア天理図書館報』101号，97－106頁，1994年5月

海野一隆「司馬江漢と地図」朝倉治彦等編『司馬江漢の研究』八坂書房，3－60頁，1994年8月（『東西地図文化交渉史研究』459－503頁所収）

海野一隆「『拾芥抄』古写本における地図（下）― 天文17年本を中心として ―」『ビブリア

天理図書館報』102号，2－21頁，1994年10月（上と合わせて『東洋地理学史研究 日本篇』176－214頁所収）

Unno, K., Maps of Japan used in prayer rites or as charms. *Imago Mundi,* 46, pp.65-83, 1994年11月（和文を「祈願・まじないに使われた日本図」として『東洋地理学史研究 日本篇』215－255頁に収録）

Unno, K., Japankarten für Gebetsriten und als Talisman. *Cartographica Helvetica,* 10, pp.20-23, 1994年

Unno, K., Cartography in Japan. J. B. Harley and David Woodward (eds.) *The History of Cartography, Vol.2, Book 2, Cartography in the Traditional East and South-east Asian Societies,* Chicago, pp.22-29, 346-477, 1994年11月

1995年

Unno, K., A Surveying instrument designed by Hojo Ujinaga (1609-1670). K.Hashimoto, C.Jami and L.Skar (eds.) *East Asian Science: Tradition and Beyond,* Kansai University Press, pp.411-417, 1995年（和文を「北条氏長考案の測量器具」として『東洋地理学史研究 日本篇』326－334頁所収）

海野一隆「イギリスへ行った最初の日本人」『学鐙』92巻12号，16－19頁，1995年（『ちずのこしかた』278－283頁所収）

海野一隆「問證堂蔵版『増補地球全図』（銅版）」『洋学』（洋学史学会研究年報）3，1995年（『ちずのこしかた』109－111頁所収）

海野一隆「世界地図の中のアジア ― 西方からの視線 ―」『月刊しにか』6巻2号，8－21頁，1995年2月（『ちずのこしかた』3－20頁所収）

海野一隆「カルタ ― 日本に伝わった海図（ポルトラーノ）」『月刊しにか』6巻2号，48－49頁，1995年2月

海野一隆「タイの伝統的海図」『月刊しにか』6巻2号，64－65頁，1995年2月（『ちずのこしかた』83－85頁所収）

海野一隆「（資料紹介）森島中良の『大日本地名便覧』」『日本古書通信』60巻8号，3－6頁，1995年8月（『東洋地理学史研究 日本篇』103－106頁所収）

海野一隆「（資料紹介）『環海異聞』の知られざる善本（上）」『日本古書通信』60巻10号，5－7頁，1995年10月

海野一隆「（資料紹介）『環海異聞』の知られざる善本（下）」『日本古書通信』60巻11号，20－21頁，1995年11月（上記（上）と合わせて『東洋地理学史研究 日本篇』116－124頁に収録）

1996年

海野一隆「地図をめぐる秀吉の生涯」『地図ニュース』291号，3－6頁，1996年（『ちずのこしかた』237－243頁所収）

海野一隆『地図の文化史一世界と日本 —』八坂書房，全214頁，1996年2月

海野一隆「地球儀の制作はいつ始まったか」『地理・地図資料』帝国書院4月号，1996年4月（『ちずのこしかた』58－60頁所収）

海野一隆「『寛政暦書』所載天地両球儀図」『洋学』（洋学史学会研究年報）4，13－43頁，1996年10月（『東西地図文化交渉史研究』554－579頁所収）

海野一隆「『寛政暦書』所載蛮製天球儀・蛮製地球儀」『洋学』（洋学史学会研究年報）4，1996年10月（『ちずのこしかた』112－114頁所収）

海野一隆「司馬江漢『地球全図略説』の諸版本」『日本古書通信』61巻10号，24－26頁，1996年10月（『東洋地理学史研究 日本篇』84－94頁所収）

海野一隆「ピントの遍歴記に見える「ナウタキン」」『学鐙』93巻11号，12－15頁，1996年11月（『ちずのこしかた』272－277頁所収）

1997年

海野一隆「漂流民津太夫らがロシアで見た巨大地球儀」『地図』35巻1号，61－62頁，『古地図研究』303号，1997年（『ちずのこしかた』244－247頁所収）

海野一隆「剣阿と『地理図』」『会報』（京都大学地理学談話会）8号，14－16頁，1997年（『ちずのこしかた』234－236頁所収）

海野一隆「稲垣文庫の洋学史関係資料」『早稲田大学蔵資料影印業叢書，洋学篇』月報15，1997年（『ちずのこしかた』284－287頁所収）

海野一隆「深田正室の『万国全図』『準天儀』『自鳴鐘』」『土浦市立博物館紀要』8号，11－29頁，1997年3月（『東西地図文化交渉史研究』305－327頁所収）

海野一隆「（資料紹介）慶長の砲術家多期真房の測量術」『科学史研究』第2期36巻201号，51－54頁，1997年3月（『東洋地理学史研究 日本篇』595－602頁所収）

海野一隆「たわむれ地図のはしり」『日本古書通信』62巻6号，11－13頁，1997年6月（『ちずのこしかた』185－189頁所収）

海野一隆「漢民族の華夷思想と地図」『東洋学報』第79巻2号，77－79頁，1997年9月（『ちずのこしかた』21－25頁所収）

海野一隆「気をつけたい地図学用語 — 近年の出版書籍から —」『地図情報』17巻3号，28－30頁，1997年12月（『ちずのこしかた』51－57頁所収）

海野一隆「推定通りだった異版『地球全図略説』」『日本古書通信』62巻10号，1997年（「司馬江漢『地球全図略説』の諸版本」1996年とあわせて『東洋地理学史研究 日本

篇』84－94頁に収録）

1998年

海野一隆「日本における地図づくりの特色」『第17回国際古地図研究協会東京シンポジウム予稿集』，1998年（『東洋地理学史研究 日本篇』165－175頁所収）

海野一隆「（書評）『近代日中学術用語の形成と伝播』荒川清秀著 ― 感動をよぶ徹底追跡 ―」『東方』206巻，22－25頁，1998年4月

海野一隆「小型版『東海道路行之図』について」『月刊古地図研究』304号，11－14頁，1998年9月（『ちずのこしかた』170－175頁所収）

海野一隆「日本人と地図」『日本古書通信』63巻12号，2－3頁，1998年12月（『ちずのこしかた』32－35頁所収）

1999年

海野一隆「『津軽大里』考」『日本古書通信』64巻1号，1999年（『ちずのこしかた』258－261頁所収）

海野一隆「大航海時代の蔭の功労者」『岩波講座世界歴史』12巻月報，1－3頁，1999年（『ちずのこしかた』262－265頁所収）

海野一隆「富士山の平面図いろいろ」『江戸時代「古地図」総覧』新人物往来社，1999年（『ちずのこしかた』176－179頁所収）

海野一隆「外来文化と日本 ― 地理学的視点からの展望 ―」『パイオニア』（関西地理学研究会）58号，1999年（『東洋地理学史研究 日本篇』133－147頁所収）

海野一隆『地図に見る日本　倭国・ジパング・大日本』大修館，全226頁，1999年5月

海野一隆「江戸時代における『二儀略説』の流布」『科学史研究』第2期38巻210号，93－98頁，1999年6月（『東洋地理学史研究 日本篇』48－61頁所収）

海野一隆「間宮海峡の地図への登場（特集海峡の地図）」『地図情報』19巻2号，26－29頁，1999年9月（『ちずのこしかた』43－50頁所収）

2000年

海野一隆「いわゆる『慶長日本総図』の源流」『地図』38巻1号，3－12頁，2000年1月（『東洋地理学史研究 日本篇』267－282頁所収）

海野一隆「エスカランテの漢字」『月刊しにか』11巻4号，90－97頁，2000年4月（『東西地図文化交渉史研究』644－650頁所収）

海野一隆「わが国におけるポルトラーノ海図の受容」有坂隆道・浅井允晶編『論集日本の洋学V』清文堂，2000年5月（『東西地図文化交渉史研究』211－270頁所収）

海野一隆「クックの航海を助けた現地人」『日本古書通信』850号（65巻5号），7－10頁，2000年5月（『ちずのこしかた』266－271頁所収）

海野一隆「地球図をあしらった南蛮屏風 — 在ミュンヘン本について —」『史林』83巻3号，486－498頁，2000年5月（『東西地図文化交渉史研究』176－188頁所収）

海野一隆「『清水物語』の作者」『日本古書通信』65巻10号，4－6頁，2000年10月（『東洋地理学史研究 日本篇』159－162頁所収）

2001年

海野一隆「『日本カルタ』の出現と停滞」『洋学』（洋学史学会研究年報）9巻，9－52頁，2001年（『東西地図文化交渉史研究』271－304頁所収）

海野一隆「寛永年間における幕府の行政査察および地図調整事業」『地図』39巻2号，1－17頁，2001年（『東洋地理学史研究 日本篇』298－325頁所収）

海野一隆「司馬江漢署名入り銅板腐食『須弥山之図』の検討」『洋学』（洋学史学会研究年報）10巻，1－13頁，2001年／2002年（『東洋地理学史研究 日本篇』617－625頁所収）

海野一隆「（討論）図形成立年代と描画年代—川村氏の拙稿批判論文を読んで」『地図』39巻1号，28－30頁，2001年3月

海野一隆「『神代巻口訣』は後世の偽作（上）」『日本古書通信』66巻6号，4－6頁，2001年6月（『東洋地理学史研究 日本篇』所収）

海野一隆「『神代巻口訣』は後世の偽作（下）」『日本古書通信』66巻7号，4－7頁，2001年7月（上記（上）と合わせて『東洋地理学史研究 日本篇』148－158頁所収）

海野一隆『ちずのこしかた』小学館スクウェア，全287頁，2001年12月

2002年

海野一隆著・王妙發訳『地圖的文化史（繁体字版）』中華書局（香港），全191頁，2002年5月

海野一隆「ちくらが沖 — 合わせて磁石山も」『ビブリア』（天理図書館報）117号，3－18頁，2002年5月（『東洋地理学史研究 日本篇』27－41頁所収）

海野一隆「むくり」『日本古書通信』67巻10号，4－5頁，2002年10月

2003年

海野一隆『東西地図文化交渉史研究』清文堂，全747頁，2003年1月

海野一隆「（報告・添付地図解説）中井家旧蔵の『日本国中図』」『地図』40巻4号，1－9頁，2003年3月（『東洋地理学史研究 日本篇』283－297頁所収）

海野一隆「間宮林蔵の測量術の師」『日本古書通信』68巻3号，7－9頁，2003年3月（『東洋地理学史研究 日本篇』549－555頁所収）

海野一隆「藤原貞幹の日本図の原拠」『月刊古地図研究』311号，2－11頁，2003年7月（『東洋地理学史研究 日本篇』506－521頁所収）

海野一隆「剣阿の『日本書紀』跋文」『日本古書通信』68巻11号，7－9頁，2003年11月

2004年

海野一隆『東洋地理学研究　大陸篇』清文堂，全373頁，2004年２月

海野一隆「『天下郡国利病書』所載地図について」海野一隆『東洋地理学研究　大陸篇』清文堂，160－177頁，2004年２月

海野一隆「（資料紹介）江戸時代刊行の東洋系民族図譜の嚆矢」『日本古書通信』69巻３号，３－６頁，2004年３月（『東洋地理学史研究　日本篇』95－102頁所収）

海野一隆「ゴーレスとは？」『日本古書通信』69巻３号，６－８頁，2004年６月

海野一隆「『異国物語』の種本」『日本古書通信』69巻９号，12－13頁，2004年９月

2005年

海野一隆「両部神道における生理学的知識」『日本古書通信』70巻１号，３－６頁，2005年１月

海野一隆「（彙報）平成16年度秋期東洋学講座講演要旨（世界のアジア学と東洋文庫）第四八三回モリソン文庫 ― その至宝地図」『東洋学報』86巻４号，547－549頁，2005年４月

海野一隆「大型複製古地図集瞥見」『月刊古地図研究』313号，28－26頁，2005年４月

海野一隆著・王妙發訳『地図的文化史（簡体字版）』新星出版社，2005年５月

海野一隆「（会員のページ）近世トルコの世界地図」『地図情報』25巻１号，25－27頁，2005年５月

海野一隆「利瑪竇『坤輿万国全図』の諸版」『東洋学報』87巻１号，101－143頁，2005年６月

海野一隆「世界民族図譜としての明代日用類書（小特集中国日用類書）」『汲古』47巻，30－39頁，2005年６月

海野一隆『東洋地理学史研究　日本篇』清文堂，全663頁，2005年７月

海野一隆「『おもろさうし』の「かわら」」海野一隆『東洋地理学史研究　日本篇』清文堂，42－47頁，2005年７月

海野一隆「江戸時代刊行のアジア諸地域図」海野一隆『東洋地理学史研究　日本篇』清文堂，335－424頁，2005年７月

海野一隆「江戸時代地球儀の系統分類」海野一隆『東洋地理学史研究　日本篇』清文堂，425－487頁，2005年７月

海野一隆「中世日本人の国土認識」『日本古書通信』70巻８号，８－10頁，2005年８月

2006年

海野一隆「東洋文庫所蔵ダンヴィルシナ地図帳」『東洋文庫書報』37号，１－26頁，2006年３月

海野一隆「補室賀信夫遺稿「伊能忠敬研究の回顧と省察」」『洋学』（洋学史学会研究年報）13，61－90頁，2006年3月

海野一隆「岩橋嘉孝の『平天儀』」『科学研究史』237号，29－33頁，2006年

海野一隆『日本人の大地像 —— 西洋地球説の受容をめぐって ——』大修館，全298頁，2006年12月

海野一隆先生の著書の書評

石山　洋「(紹介) 海野一隆『地図の文化史 — 世界と日本 —』」『科学史研究』37巻205号，61－63頁，1998年

石山　洋「(紹介) 海野一隆『地図に見る日本 — 倭国・ジパンク・大日本 —』」『科学史研究』38巻212号，249－251頁，1999年

黒田日出男「(書評) 海野一隆『地図に見る日本 — 倭国・ジパンク・大日本 —』」『朝日新聞』1999年7月11日読書欄

王妙発「(書評) 海野一隆的『地図文化史』」『歴史地理』（上海人民出版社）15輯，374－376頁，1999年

長岡正利「(書評・紹介) 海野一隆『地図に見る日本 — 倭国・ジパンク・大日本 —』」『地図』37巻2号，27頁，1999年

小林　茂「(文献紹介) 海野一隆『地図に見る日本 — 倭国・ジパンク・大日本 —』」『地図情報』19巻4号，29頁，2000年

Dege, Eckart, (book review) The History of Cartography, vol.2, book 2, Cartography in Traditional East and Southeast Asian Societies. *Journal of Asian Studies,* 60(1), pp.151-153, 2001年

石山　洋「(紹介) 海野一隆『東西地図文化交渉史研究』」『科学史研究』43巻230号，123－125頁，2004年

石山　洋「(紹介) 海野一隆『東洋地理学史研究　大陸篇』」『科学史研究』43巻232号，249－251頁，2004年

石山　洋「(紹介) 海野一隆『東洋地理学史研究　日本篇』」『科学史研究』45巻238号，134－139頁，2006年

海野一隆先生関連の文献

谷口規矩雄「海野一隆先生を送る」『大阪大学教養部研究集録（人文・社会科学）』33輯，90頁，1985年1月

飯塚修三「我家の地球儀と海野一隆先生」『西宮市医師会会報』426号，22－23頁，2006年1

月

川村博忠「海野一隆先生のご逝去を悼む」『古地図研究ニュース』52号，1頁，2006年5月

小林　茂「(訃報) 海野一隆名誉教授（旧教養部）逝去」『阪大 NOW』91号，48頁，2006年8月

小林　茂「海野一隆先生のご逝去を悼む」『地図情報』26巻2号，41頁，2006年8月

久武哲也「(紙碑) 東洋地図学史研究の碩学，海野一隆先生のご逝去を悼む」『地図』44巻3号，巻頭2頁，2006年9月

前田　昇「追悼（内田秀雄先生・位之木寿一先生・海野一隆先生・白井哲之先生)」『大阪教育大学地理学会報』51号，9－10頁，2006年9月

武藤　直「池田時代の海野一隆先生・内田秀雄先生を偲んで」『大阪教育大学地理学会報』51号，11－12頁，2006年9月

山本　担「海野先生を悼む」『パイオニア』（関西地理学研究会）79号，7頁，2006年11月

吉川淳一「替え歌の思い出」『パイオニア』（関西地理学研究会）79号，7－8頁，2006年11月

米田藤博「サイクリングで飛鳥へ」『パイオニア』(関西地理学研究会) 79号，8－9頁，2006年11月

寺谷寿夫「海野一隆先生を悼む」『パイオニア』（関西地理学研究会）79号，10頁，2006年11月

中谷権二郎「回想」『パイオニア』（関西地理学研究会）79号，10－11頁，2006年11月

川村博忠「海野一隆先生の思い出と学恩」『国絵図ニュース』（国絵図研究会）19号，2－4頁，2007年1月

Kawamura, H., (Orbituary) Unno Kazutaka (1921-2006). *Imago Mundi,* 59. 印刷中